

## (2) 地域の祭祀にみる歴史的風致

### はじめに

北中城村の祭祀活動等を調査した『北中城村歴史風致資産調査報告書－祭祀－』(令和3年(2021)発刊。以下、『－祭祀－』)によると、令和2年(2020)時点において北中城村では年間60件以上の祭祀が行われており、その大半は自治会単位で執り行われている。

各祭祀では、地域に古くから残る拝所や聖地等を地域住民が巡拝し、祖先への崇拝や五穀豊穰<sup>すうはい ごこくほうじょう</sup>、子孫繁栄などを祈願することで、地域への愛着や親しみ、住民同士の交流を深める活動が脈々と引き継がれている。

### ①祖先祭祀にみる歴史的風致

#### a) 祖先祭祀にかかる取り組みについて

沖縄では、先人や祖先を敬い、その祖霊を拝する祖先祭祀が集落ごとの年中行事として現在も行われている地域が多く、地域の暮らしと深く結びついた形で受け継がれている。北中城村においても、字<sup>あざ</sup>※1シーミーや喜舎場公例祭、仲順大主例祭などの祖先祭祀が行われており、いずれも集落内に位置する拝所や墓など、祖先にゆかりのある場所を舞台として人々が集う。これらの祭祀では、人々が静かに拝みを捧げる場面や、一転して賑やかに地域内を巡拝する様子など、集落の空間と人々の活動が一体となった景観が生み出されている。

#### b) 建造物等

##### <歴史的風致を形成する建造物>

##### ●喜舎場公の墓

村の創建者といわれている喜舎場公の墓で、喜舎場地区北西部に所在する。喜舎場公園後方、丘陵斜面の中腹に位置し、琉球石灰岩の上に石を積み上げ、その上にコンクリートで造った笠塔婆<sup>かさとうぼ</sup>型の墓がある。墓に向かって右側に墓碑があり、表に「喜舎場公之墓 昭和十二年八月建設」と刻まれている。墓前の香炉には「奉納 字喜舎場向上會」、墓の前方にある一対の灯籠に「奉納 昭和十二年八月吉日」と刻まれている。北中城村内



※1 字：市町村を細分する区画。地域の単位。本村の自治会のほとんどは字単位で組織されている。

の旧跡を調査した『北中城村歴史風致資産調査報告－旧跡－』（以下、『－旧跡－』）によると、喜舎場公の墓は一時荒廃したが、昭和12年(1937)に集落をあげて補修されたという。

喜舎場の字シーミーや喜舎場公例祭にて拝される。

### ● 仲順大主之墓

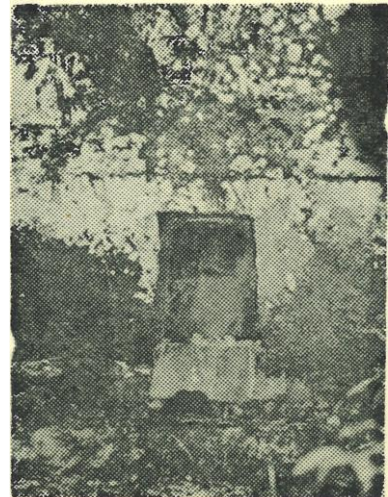
仲順地区中央部のチュンジュンバル(仲順原)に所在し、仲順が創建された際の統治者の墓とされる。仲順大主については『－祭祀－』によると、開慶元年(1259)に琉球国王の位を英祖へ譲った義本<sup>ぎほん</sup>王を<sup>かくま</sup>匿したとする伝承が残されており、そこから13世紀中葉の人物と考えられている。

墓は琉球石灰岩の丘陵に横穴を掘って造られており、墓面が四角く削られている。供物台や袖垣は切石を組んで設えられている。正確な建造年は不詳だが、昭和45年(1970)に発行された『村史』において「仲順大主の墓」とされる写真が残されていることから、それ以前より存在していたものと考えられる。

仲順の字シーミーにて拝される。



■ 仲順大主の墓（『－旧跡－』より）



■ 『村史』（昭和45年発行）に掲載の写真

### ● お宮

仲順集落の北側に位置する公園内に建つ、コンクリート製の祠である。屋根は切妻造を基本とし、前方に庇を伸ばした流造の構造となっている。





『北中城村史 第二巻 民俗編』（平成8年(1996)）によると、昭和2年(1927)に集落の統治者である仲順大主と、舜天王統の開祖とされる「舜天王」、舜天王統の三代目の王である「義本王」を合祀して建立されたという。また、同資料では、現在のコンクリートの祠は、昭和44年(1969)に改築されたものであると残されている。

お宮前に設けられた祭壇において、仲順大主例祭が行われる。



<その他の建造物>

本計画において、「祖先祭祀にみる歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

地区	建造物名		概要
喜舎場の字シーミー・喜舎場公例祭で巡拝される建造物	喜舎場村祖先の墓（喜舎場公之子孫上代之墓）		喜舎場に所在する墓で、喜舎場の発祥に関わる旧家、屋号：仲間の祖先の墓とされる。 元々は現在の場所から西側丘陵に位置していたが、地滑りなどを考慮して昭和45年(1970)頃に移設されたと伝えられているものの、詳細な資料や建築年代は不詳。 喜舎場の字シーミー・喜舎場公例祭では三番目に拝される。
	アーマンチュー（喜舎場村祖先之墓）		喜舎場公園の北側丘陵に所在する墓。正確な建築年代は不詳。 喜舎場の字シーミー・喜舎場公例祭では四番目に拝される。
	仲間 <sup>ニドツクル</sup> 根所		喜舎場に所在する旧家で、喜舎場村の創建者と伝えられる喜舎場公の直系に連なるといわれており、集落の発祥に関わる最も古い家の一つである。現在は敷地の一角に、自治会によって祖霊や火の神を祀る建物・神屋が設けられ、そこで祭祀が執り行われているが、正確な建築・建替年代は不詳。 喜舎場の字シーミーでは一番目と最後に、喜舎場公例祭では一番目に拝される。
仲順大主例祭で巡拝される建造物	仲順流りの碑		仲順公園内に所在する歌碑。仲順村の創始者である仲順大主にまつわる伝承を題材にした歌が刻まれている。 平成10年(1998)に建立された。

## c) 活動

### 活動1. 喜舎場公例祭

喜舎場公例祭とは、北中城村喜舎場地区で旧暦9月18日に執り行われている祭祀であり、集落の創建者とされる喜舎場公の墓を中心に集落内の墓所や拝所を巡拝し、喜舎場公への感謝と住民の無病息災、集落の発展を祈っている。参加者は自治会の代表者や地域住民の他、喜舎場公に関わる門中（父系血縁の親族）などが招待される。

琉球王府時代の正史『球陽』の外巻として乾隆10年(1745)に編纂された『遺老説伝』においては、元々旧暦2月に喜舎場の住民の健康を祈願する祭祀が執り行われていたとされているが、『一祭祀一』によれば、昭和12年(1937)に喜舎場公の墓が建立されたことで旧暦9月18日に行われるようになったという。

祭祀は、最初に喜舎場公民館から道ジュネーを開始し、法螺貝、銅鑼、鉦、太鼓を打ち鳴らして周辺一帯に音を響かせながら、喜舎場公の直系に当たるとされる旧家・仲間根所へ向かう。屋敷の一角に神屋があり、その中にある祭壇を拝む。

祭壇には仲間根所の火の神の香炉、ムラの火の神の香炉、仲間の祖先を祀る香炉、アマミキョを祀る香炉が安置されており、まず仲間根所とムラの火の神の香炉にビンシー(酒、花米、硬貨)、菓子(クンペン、蒸し饅頭)、果物(ミカン)、火をつけた線香を供え、ビンシーの盃に酒を注ぎ、参加者全員で拝む。その他香炉も同様に拝み、供物の果物と菓子を供えておく。

根所を拝み終わると、喜舎場公園内に所在する喜舎場公の墓へと道ジュネーをしながら向かう。墓前に参加者一人ひとりが線香を供え、自治会長の合図で一斉に拝む。

次に喜舎場村祖先の墓へと移動し、ビンシーと供物を用意し、自治会長が墓前



■法螺貝や太鼓の音を響かせながら喜舎場公の墓へ向かう道ジュネー



■仲間根所へ向かう道ジュネーの様子



■喜舎場公の墓に参加者が供物を備える

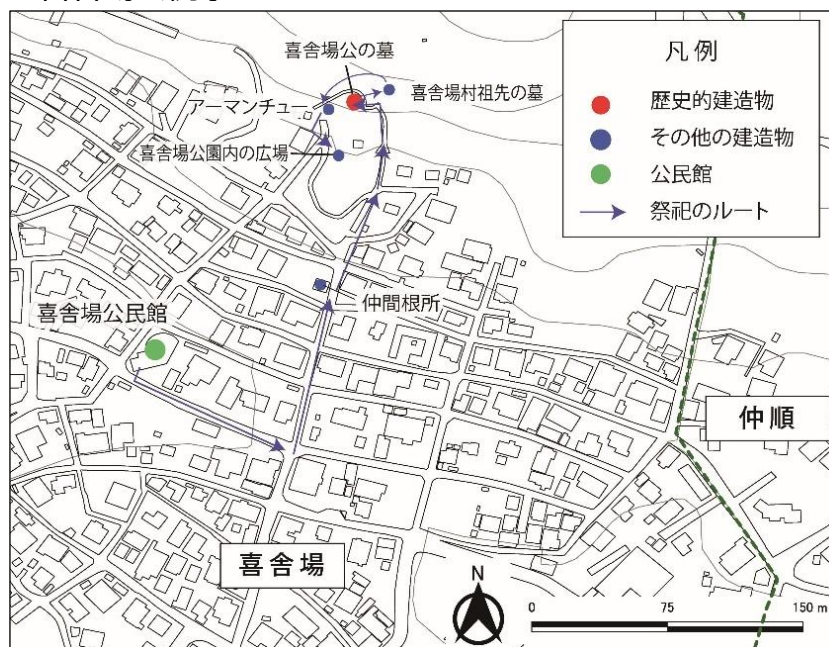
に線香を供えた後、参加者も一斉に拝む。

その後、参加者たちは道ジュネーを再開し、喜舎場公園内の広場へと向かう。その際、自治会長と役員は道ジュネーの列から離れて、前述の喜舎場祖先の墓とは別の「アーマンチュー」と呼ばれる祖先の墓を拝み、それから広場へと移動する。広場では楽器の演奏を終え、参加者に供物や飲み物を配り、しばらく歓談した後、祭祀は終了となる。



■喜舎場祖先の墓を拝む参加者

### <喜舎場公例祭のルート>

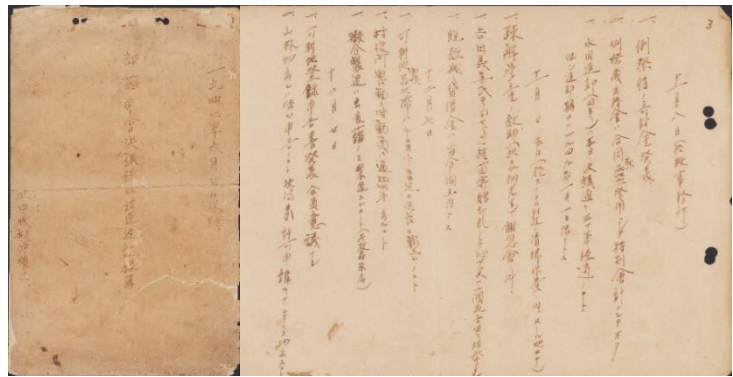


## 活動2. ちゅんじゅんウフスーれいさい 仲順大主例祭

仲順大主例祭とは、仲順地区で旧暦9月13日に行われる集落の創建者・仲順大主を祀る例祭である。仲順大主を祭神として昭和2年（あるいは3年とも伝えられる）に建立されたお宮において、豊穰の恵みへの感謝と地域住民の無病息災・子孫繁栄を願う祭祀が、厳かな雰囲気で行われる。一方、拝礼が終了すると、お宮前の広場に設けられている舞台では地域住民や各種団体による余興が披露されるなど、一転して賑わいのある催しが展開される。

仲順大主例祭の起源は明らかではないが、開催日である旧暦9月13日は、お宮の創建日に由来すると伝えられている。『村史民俗編』（平成8年(1996)発行）に

よれば、「お宮は、昭和2年(1927)に創建された」と記されている。また、仲順自治会所蔵の昭和22年(1947)『部落常會決議録並諸通達記録簿』には、「例祭時ノ寄附全発表。例祭歳出金ハ合同慰靈祭用トシテ特別会計トシテオク」との記載が



■昭和22年(1947)6月以降 部落常會決議録並諸通達記録簿

あり、少なくとも昭和22年(1947)以前から、地域住民が主体となってこの祭祀が執り行われていたことが分かる。

祭祀当日には、まず仲順公園敷地内に建つ戦没者慰霊塔前で慰霊祭が行われ、その後、同敷地内に建立されているお宮へと移動して、例祭が行われる。例祭には自治会役員をはじめ、村長、婦人会、青年会、子供会、老人会などの各団体や地域住民が参列し、お宮前に設けられた祭壇に花や菓子、酒などが捧げられる。次いで、開会の挨拶に続いて玉串奉奠や祝詞奏上が行われ、豊穰の恵みへの感謝と、地域住民への無病息災、子孫繁栄を願う厳かな祝詞が公園内に響き渡る。

その後、お宮前の公園内に設けられた舞台において、三味線や琴の演奏など各種団体や個人による余興が披露される。舞台前には、余興を楽しむ住民たちの賑わいに包まれる様子を目にすることができる。

### 活動3. 字シーミーの活動

シーミーとは、一年を春夏秋冬の四つの季節に分け、それを更に六つの段階別に振り分けた暦の見方である「二十四節気」において、春に属する清明の節に墓参りをする祖先供養の祭祀である。元々は中国由来の祖先祭祀であり、琉球王府により18世紀中期から編纂が開始された琉球の正史『球陽』において、中



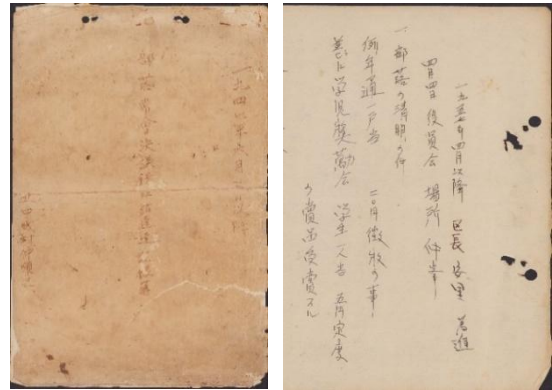
■仲順大主の墓に供えられた供物

国からとり入れた清明の節での祭祀に触れる記述がある他、明治11年(1878)に沖縄滞在中の見聞録を記した日本帝国陸軍軍医・渡辺重綱の『琉球漫録』においても、シーミーの様子を詠んだ漢詩が残されている。現代でも清明の節になると、祖先の墓前で親族が集う祭祀の様子を県内各地で目にすることができる。

この清明の節のころに、集落の聖地や旧家、集落の成り立ちと深く関わる人物の墓などを拝するのが字シーミーである。自治会の代表者や地域住民が中心となり、集落の拝所や墓所等を巡って地域の偉人への供養を行い、最後は参加者同士で供物を分け合って和やかに執り行われる祭祀である。代表例として仲順地区の字シーミーの詳細を以下に示す。

仲順の字シーミーでは、清明の節の期間において日を選び、集落の創建にまつわる人物の墓を拝む。

仲順の字シーミーの歴史については、仲順公民館所蔵の『部落常會決議録並諸通達記録』(昭和22年(1947))にも残されており、それによれば、『四月三日 一. 清明報告 (旧三月三日村一斉) 今後字清明は字負擔 (負担) ノコト』(昭和23年(1948))や『(一九五七年四月以降) 四月四日 一. 部落の清明の件例年通一戸当 二〇円徴収の事』(昭和32年(1957)。「部落の清明」は字シーミーを指す)と記されている。このことから、字シーミーが、自治会(かつての部落常會)を中心に集落の住民によって一体となって執り行われてきた様子がうかがえる。



■『部落常會決議録並諸通達記録簿』  
(左：1947年6月以降/右：1957年4月以降)

現在の仲順の字シーミーにおいては、自治会長を中心に祭祀に詳しい方や地域の有志数名が仲順大主の墓へ向かい、供物となる餅や重箱、酒、茶、水を供え、線香やあの世のお金であるウチカビに火をつけて拝んでいる。その後、墓裏手の「シージモー」と呼ばれる野原で供物を食しながら歓談して祭祀を締めくくる様が見られる。

現在の仲順の字シーミーにおいては、自治会長を中心に祭祀に詳しい方や地域の有志数名が仲順大主の墓へ向かい、供物となる餅や重箱、酒、茶、水を供え、線香やあの世のお金であるウチカビに火をつけて拝んでいる。その後、墓裏手の「シージモー」と呼ばれる野原で供物を食しながら歓談して祭祀を締めくくる様が見られる。

### <仲順の字シーミーのルート>





■参加者は三本ずつ線香をあげて拝む



■最後は参加者が供物を食べながら歓談

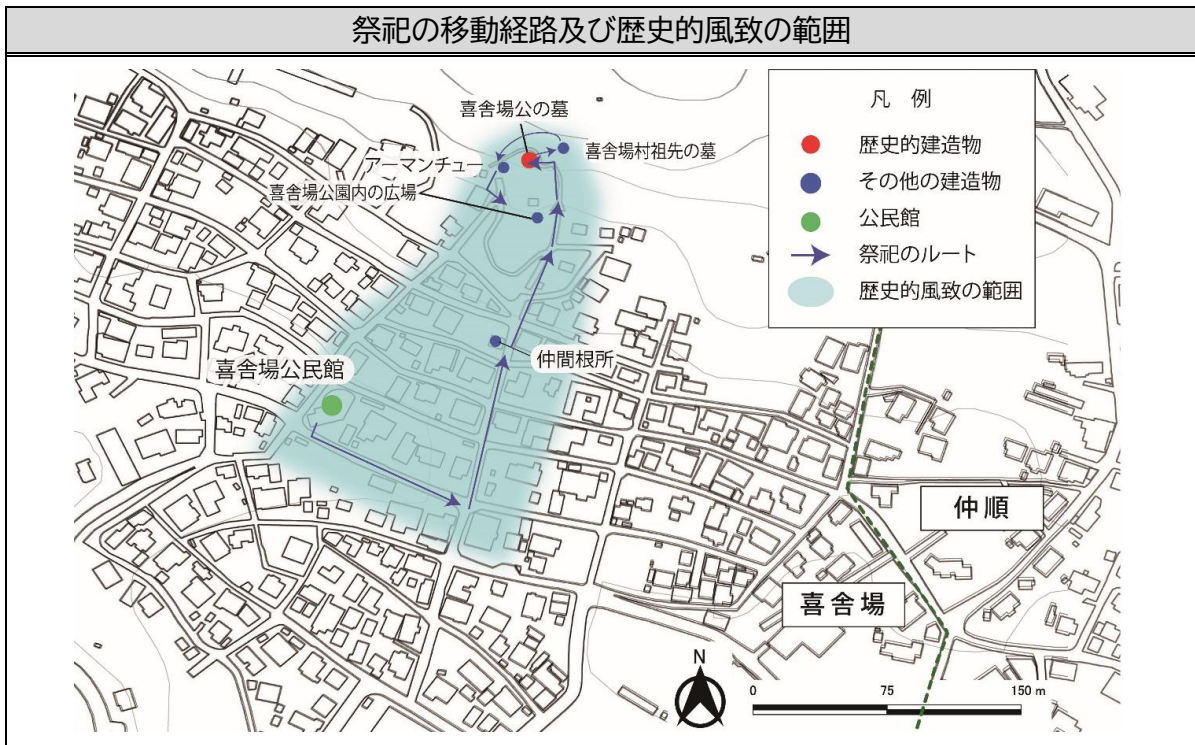
### <各地域の字シーミーの活動の歴史性>

地区	活動の概要及び歴史
喜舎場	○喜舎場自治会収支報告書（昭和25年（1950））での記述有り
仲順	○仲順公民館所蔵の『部落常會決議録並諸通達記録簿』（1947年・1957年）記述。詳細は前述のとおり

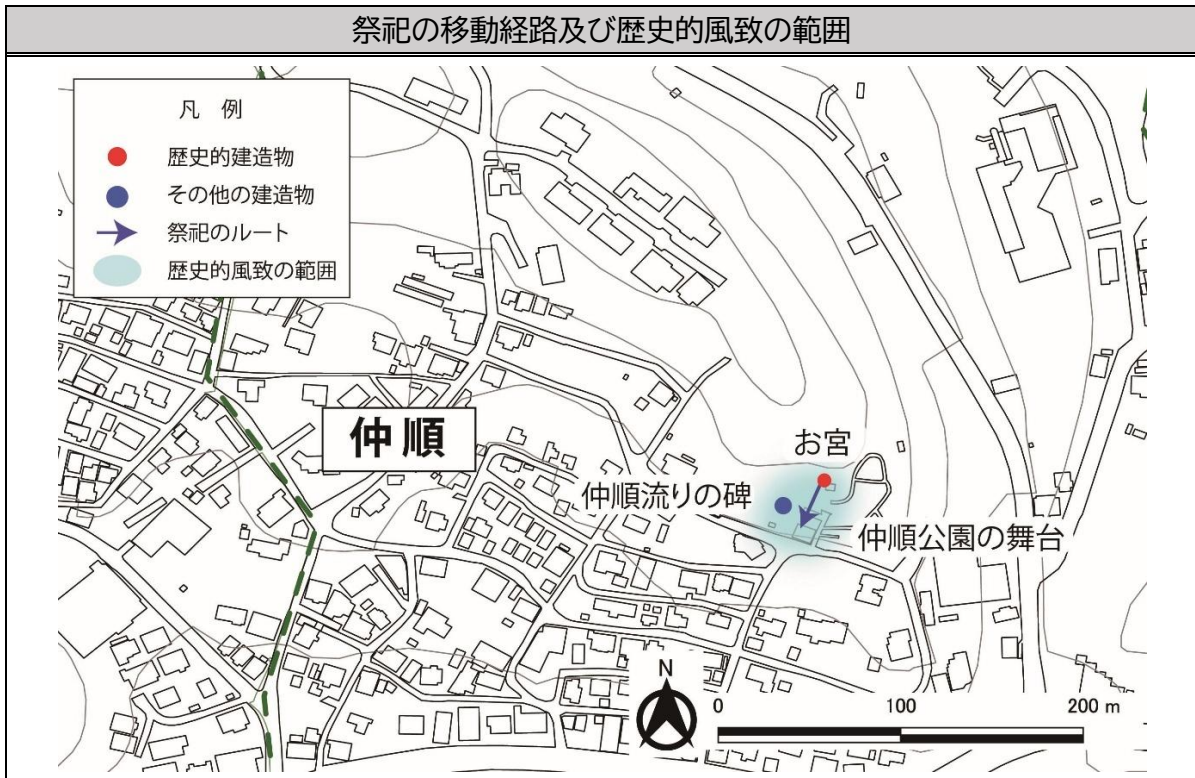
#### d) 祖先祭祀にみる歴史的風致のまとめ

喜舎場や仲順で現在も地域住民に受け継がれている祖先崇拜の営みは、歴史的な趣をもつ地域の拝所で静かに手を合わせて祖霊を拝む厳かな雰囲気と、法螺貝や太鼓の音を響かせながら地域を巡拝する賑やかな雰囲気とが相まって、地域固有の歴史的風致を形成している。

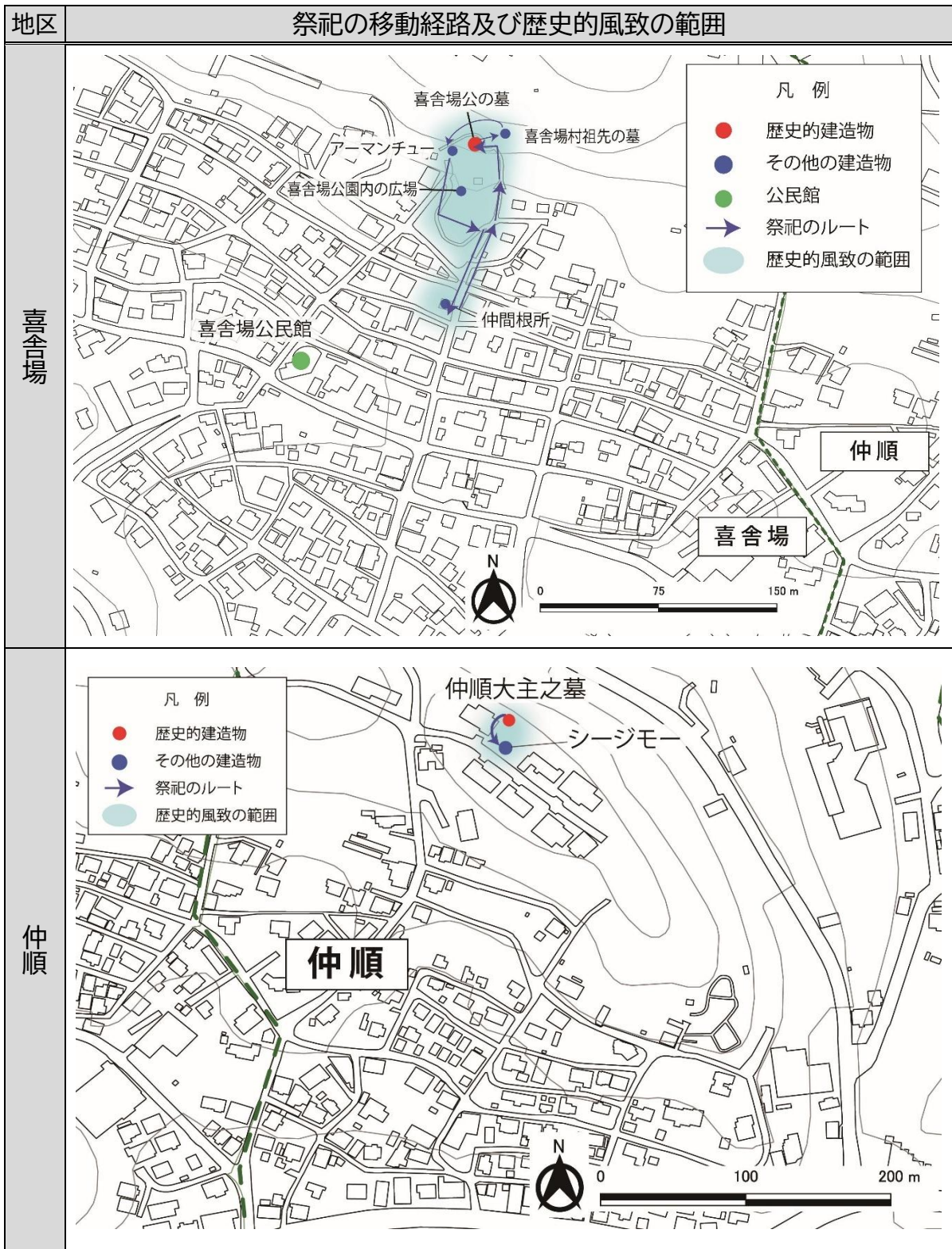
<喜舎場公例祭にみる歴史的風致>



<仲順大主例祭の歴史的風致>



<字シーミーにみる歴史的風致>



## ②ウマチーにみる歴史的風致

### a) ウマチーにかかる取り組みについて

ウマチーとは、沖縄諸島で執り行われる稲麦にかかわる四種の祭祀である。それぞれの実施月(旧暦)を冠して二月ウマチー、三月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーという。二月ウマチーは麦の成熟を祈願し、三月ウマチーは麦の収穫を感謝する。五月ウマチーは稲穂の成熟を祈願し、六月ウマチーは稲穂の収穫を感謝する。

康熙52年(1713)成立の『由来記』では、なかぐすくまぎり中城間切内の各集落拝所で執り行われる年中祭祀について、「麦穂祭」や「稲穂祭」、「稲大祭」、「稲二祭」という記述が残されており、これは「麦穂祭」が二月ウマチー、「稲穂祭」が五月ウマチー、「稲大祭」が六月ウマチー、「稲二祭」が稲穂祭と稲大祭を合わせて指しているとされる。なお、同資料内では三月ウマチーを「麦大祭」と記しているが、北中城村内では以前から三月ウマチーは執り行われていないとされている。

実施月の旧暦(太陰暦)15日には、自治会の代表者や地域住民が集落の拝所等を巡って供物を備え、地域の繁栄を祈願する様子をうかがうことができる。

『一祭祀一』によると、現在も村内の幾つかの集落において同祭祀は執り行われており、その実施状況を以下に整理するとともに、代表例として渡口地区のウマチーの詳細を以下に示す。



■比嘉のウマチーで供物を捧げる様子(ヒジャヌトウン)



■和仁屋のウマチーの様子(エーガー)

ウマチーを実施している地域			
喜舎場	五月ウマチー 六月ウマチー	仲順	二月ウマチー、五月ウマチー 六月ウマチー
和仁屋	五月ウマチー 六月ウマチー	熱田	二月ウマチー、五月ウマチー、 六月ウマチー
渡口	五月ウマチー 六月ウマチー	島袋	二月ウマチー、五月ウマチー 六月ウマチー
比嘉	五月ウマチー	安谷屋	二月ウマチー、五月ウマチー 六月ウマチー

## b) 建造物等

### < 渡口のウマチーにおいて歴史的風致を形成する建造物 >

#### ● 渡口の<sup>トゥン</sup>殿

渡口地区に所在する拝所で、集落後方に位置するトゥンヌモー、またはトゥンモーと呼ばれる小丘に設けられた方形造の石祠である。屋根部には「昭和十年九月七日設立」と刻まれていることから、昭和10年(1935)頃に設置されたものとみられる。



渡口の五月ウマチー及び六月ウマチーの際には、二番目に拝されている。

#### ● 和<sup>ワ</sup>仁<sup>ナ</sup>屋<sup>マ</sup>間のテラ

渡口地区に所在する石造りの祠である。屋根頂部には宝珠が据えられ、壁面は切石による布積みとなっている。内部には神体とされる靈石が数個安置されており、子宝の神として多くの参拝者が訪れている。地元では「和仁屋間のテラ」の呼称が一般的であるが、渡口地区に所在するため、「渡口のテラ」の名称で昭和56年(1981)に県の有形民俗文化財に指定された。



康熙52年(1713)成立の『由来記』には、渡口村の拝所として和仁屋間のテラについての記述が見られ、「往昔、渡口村、高時ト申者、靈石ヲ権現ト崇、宮建立仕タル由伝アリ（高時という人物が靈石を権現として宮に祀った）」と伝えられている。また、昭和45年(1970)発刊の『村史』にも、当時の和仁屋間のテラの写真が残されている。

渡口の五月ウマチー及び六月ウマチーの際には、九番目に拝されている。

#### ● 渡口洞穴遺跡

渡口地区に所在する遺跡で、集落後方に位置するトゥンヌモー、またはトゥンモーと呼ばれる小丘の東側を彫り込んで作られた洞穴である。この洞穴は古墓になっており、中には石棺が安置されている。



洞穴の前庭には貝塚や土器などが見られ、沖縄貝塚時代後期末からグスク時代初期頃の遺跡と考えられている。また、昭和45年(1970)発行の『村史』にも、当時の渡口洞穴の写真が残されている。

渡口の五月ウマチー及び六月ウマチーの際には、十二番目に拝されている。








<各地域のウマチーにおいて歴史的風致を形成する建造物>







地区	建造物の概要及び歴史性
仲順	<p>お宮</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>仲順集落中央部のチュンジュンバル地区に所在する祠。仲順大主・舜天王・義本王を祀っているとされる。</li> <li>『村史民俗編』(平成8年(1996)発刊)にて昭和44年(1969)改築と記述。</li> </ul>
比嘉	<p>ヒジャヌタウン／カニマン御嶽</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『村史民俗編』(平成8年(1996)発刊)にて、昭和27年(1952)建立と記述。</li> </ul>
熱田	<p>島根殿</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『村史民俗編』(平成8年(1996)発刊)にて昭和15年(1940)に建立されたと記述。</li> </ul>
和仁屋	<p>イーヌウタキ(ワナウガン〈和仁屋御願〉)【渡口】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>康熙52年(1713)『琉球国由来記』において、「上立神嶽」の記載。</li> <li>『村史民俗編』(平成8年(1996)発刊)において、「和仁屋御願が位置する小高い丘周辺はタチザンムイと呼ばれ、「上立神嶽」は現在の和仁屋御願」とされる。</li> </ul>
渡口	<p>渡口の殿：石祠の屋根に『昭和十年九月七日設立』と刻まれている。</p> <p>和仁屋間の寺：『村史』(昭和45年(1970)発刊)にて写真掲載。</p> <p>渡口洞穴遺跡：『村史』(昭和45年(1970)発刊)にて写真掲載。洞穴前庭からの出土遺物の状況から、沖縄貝塚時代後期末～グスク時代初期頃の遺跡と想定。</p>
安谷屋	<p>根所火の神</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>康熙52年(1713)『由来記』において、「中之根所」の記載。</li> <li>『村史民俗編』(平成8年(1996)発刊)においては、「中之根所」を根所火の神に比定している。</li> </ul> <p>グスクの七殿</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>康熙52年(1713)『由来記』にて、「安谷屋城之殿」の記載。</li> <li>『村史民俗編』(平成8年(1996)発刊)においては、「安谷屋城之殿」をグスクのタウン(グスクの七殿)に比定している。</li> </ul>

<その他ウマチーで巡拝される建造物>




本計画において、「ウマチーにみる歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

地区	建造物名		概要
比嘉	ニッチガミ		比嘉に所在する拝所。昭和46年(1971)建立とされるが正確な設置年代は不詳。 比嘉の五月ウマチーにおいては一番目に拝される。
	遥拝所 (ヨーチガー・タ トウイガー)		比嘉に所在する拝所。正確な建築・建替年代は不詳。 比嘉の五月ウマチーにおいては四番目に拝される。
熱田	ンブガー		熱田に所在するカー(井泉)。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて一番目に拝される。
	メーヌカー		熱田に所在するカー(井泉)。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて四番目に拝される。
	アガリユーヌウト ウーシ		熱田に所在する拝所。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて三番目に拝される。
	仲門 <sup>ナカド</sup>		熱田に所在する拝所で、熱田の中で最も大きな門中の一つである仲門の祖霊などを祀った建物。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて五番目に拝される。
	イーヌカー		熱田に所在するカー(井泉)。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて六番目に拝される。
	松島のカー		熱田に所在するカー(井泉)。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて七番目に拝される。
	根所 <sup>ニドツクル</sup>		熱田に所在し、熱田の発祥に関わる旧家。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて八番目に拝される。
	ビジュール		熱田に所在する祠。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて九番目に拝される。

地区	建造物名		概要
熱田	ニーヤガー		熱田に所在するカー（井泉）。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて十番目に拝される。
	4班の井戸・イチバルガー		熱田に所在するカー（井泉）。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて十一番目に拝される。また、和仁屋の五月ウマチー、六月ウマチーにおいて八番目に拝される。
	熱田シー		熱田に所在する祠。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて十四番目に拝される。
	和仁屋御獄（カンシャギ） <small>ウタキ</small>		熱田に所在する拝所だが、熱田の祭祀では拝されず、和仁屋の祭祀で拝される。正確な建築・建替年代は不詳。 和仁屋の五月ウマチー、六月ウマチーにおいて九番目に拝される。
	アガリユーヌウトウシ		熱田に所在する拝所だが、熱田の祭祀では拝されず、和仁屋の祭祀で拝される。正確な建築・建替年代は不詳。 和仁屋の五月ウマチー、六月ウマチーにおいて十番目に拝される。
和仁屋	イーヌカー		和仁屋に所在するカー（井泉）。正確な建築・建替年代は不詳。 五月ウマチー、六月ウマチーにおいて四番目に拝される。
	ムッテーガー （ニーブガー）		和仁屋に所在するカー（井泉）。昭和61年（1986）以降に改修されたが、元々のカーの正確な建築年代は不詳。 和仁屋の五月ウマチー、六月ウマチーにおいて五番目に拝される。
	ンブガー		和仁屋に所在するカー（井泉）。平成28年（2016）に改修されたが、元々のカーの正確な建築年代は不詳。 和仁屋の五月ウマチー、六月ウマチーにおいて六番目に拝される。
	エーガー		和仁屋に所在するカー（井泉）。平成2年（1990）に改修された。改修以前から水は沸いておらず、石積みも確認できない。 和仁屋の五月ウマチー、六月ウマチーにおいて七番目に拝される。
渡口	ウフヤンチョー カミヤコ 大屋門中の神屋		渡口に所在する屋号：大屋の神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。正確な建築・建替年代は不詳。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて一番目に拝される。

地区	建造物名		概要
渡口	ンブガー		渡口に所在するカー（井泉）で、集落の北西側に位置する。上部はコンクリートで整備されているが、内部には石積みを確認でき、現在も湧水がある。正確な建築・建替年代は不詳。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて四番目に拝される。
	ムラガー （ンブガー）		渡口に所在するカー（井泉）で、集落の北側に位置する。上部はコンクリートで整備されているが、内部には石積みを確認でき、現在も湧水がある。正確な建築・建替年代は不詳。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて五番目に拝される。
	ムラガー		渡口に所在するカー（井泉）で、集落の北東側に位置する。上部はコンクリートで整備されているが、内部には石積みを確認でき、現在も湧水がある。正確な建築・建替年代は不詳。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて六番目に拝される。
	ハマガー		渡口に所在するカー（井泉）。元々の場所から国道拡張のために現在地に移設され、その際にコンクリートブロックを組んで井戸を模した形にされたと伝えられるが、正確な建替年代は不詳。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて七番目に拝される。
	ウグウングワー		渡口に所在する拝所。昔はガジマルが生い茂る中にクルトゥ石（細粒砂岩）で囲まれた祠があり、国道拡張のために現在地に移設されたと伝えられるが、正確な建築・建替年代は不詳。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて八番目に拝される。
	拝所（カー）		渡口に所在するカー（井泉）。元々は別の場所に所在していたが、平成20年（2008）に現在地に移設され、コンクリートブロックを組んで井戸を模した形にされた。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて十番目に拝される。
	ムラガー		渡口に所在するカー（井泉）で、集落の南東側に位置する。上部はコンクリートで整備されているが、現在も湧水が確認できる。正確な建築・建替年代は不詳。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて十一番目に拝される。

地区	建造物名		概要
渡口	ナウグスクムンチョー カミヤニ 宮城門中の神屋		渡口に所在する神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。かつて宮城門中の祖先は別の村に居住していたが、渡口集落へ移り住んだ際に、集落の発祥に関わった家である屋号：大屋と併合されたと伝えられている。正確な建築・建替年代は不詳。 渡口の五月ウマチー・六月ウマチーにおいて最後の十三番目に拝される。
	古井戸		渡口に所在し、熱田集落発祥に関わる井戸。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいては12番目に拝される。また、和仁屋の五月ウマチー、六月ウマチーにおいては二番目に拝される。
	クミンシツ 米須嶽		渡口に所在し、熱田集落発祥に関わる祠。昭和63年（1988）に改修された。 熱田の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて十二番目に拝される。また、和仁屋の五月ウマチー、六月ウマチーにおいて三番目に拝される。
安谷屋	ナウカ カミヤニ 仲の神屋		安谷屋地区に所在する旧家で、集落の草分けである「仲」の神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。正確な建築・建替年代は不詳。 安谷屋の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて一番目に拝される。
	イーヌウタキ		安谷屋に所在し、安谷屋グスクの頂上付近に位置する御嶽。平場の中央に石の香炉が置かれ、後方には石灰岩礫が環状に配置されている。 安谷屋の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて四番目に拝される。
	ウトウーシ		安谷屋の安谷屋グスク内に所在する拝所。岩の前に二基の香炉が安置されており、島尻と今帰仁を遥拝するための場所とされる。 安谷屋の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて五番目に拝される。
	シムヌウタキ		安谷屋の安谷屋グスク北東麓に所在する拝所。平場に二基の香炉が安置されている。 安谷屋の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて六番目に拝される。
	ヘドウスー 邊土大主之墓		安谷屋に所在し、安谷屋の村建てを行った人物とされる邊土大主の墓である。平成7年（1995）に老朽化のために建て替えられた。 安谷屋の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて七番目に拝される。

地区	建造物名		概要
安谷屋	熱田 <small>カミヤニ</small> の神屋		安谷屋地区に所在する旧家「熱田」の神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。正確な建築・建替年代は不詳。 安谷屋の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて八番目に拝される。
	瑞慶覧ヌンドウンチ跡		安谷屋に所在する拝所で、瑞慶覧村の祭祀を管掌していた瑞慶覧ノロ（祝女、女性祭司）が安谷屋村に嫁いだために安谷屋に移された建物の跡とされる。 現在は神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）だけが残されており、正確な建築・建替年代は不詳。 安谷屋の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて九番目に拝される。
	安谷屋ヌンドウンチ		安谷屋に所在する拝所で、安谷屋の祭祀を管掌していた安谷屋ノロ（祝女、女性祭司）の屋敷。敷地内にはノロの住居と神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）があるが、正確な建築・建替年代は不詳。 安谷屋の二月ウマチー、五月ウマチー、六月ウマチーにおいて十番目に拝される。

### c) 活動

#### <渡口のウマチーの活動の詳細>

渡口地区のウマチーについては、康熙こうき52年(1713)成立の『由来記』によると、「麦穂祭之時、神酒・神饌（中略）、稲二祭之時、花米・五水（中略）之供。安谷屋巫ニテ祭祀也。（麦穂祭の時には、渡口の百姓によって神酒や神饌等を捧げた。また、稲二祭の時には花米や神饌の泡盛等を捧げた。安谷屋ノロが祭祀を行った。）」と記されている。かつては集落祭祀を司っていた女性祭司・ノロが豊作を祈願して行っていた祭祀だが、現在は稲作を行っておらず、神役（ノロ）の継承者もいないため、自治会を中心に有志の地域住民によって、集落の人々の健康や繁栄を祈願している。



■渡口の殿への拝礼



■宮城御嶽。直接拝されることはなく、遥拝で拝される

渡口地区の五月ウマチーと六月ウマチーはいずれも同じ順路で行われ、五月ウマチーは旧暦5月15日、六月ウマチーは旧暦6月15日に、自治会役員と有志の地域住民が集い、供物を携えて集落内の拝所十二か所（大屋門中の神屋・渡口の殿・ンブガー・ムラガー（集落北）・ムラガー（集落北東）・ハマガー・ウグワングワー・和仁屋間のテラ・拝所・ムラガー（集落南東）・渡口洞穴遺跡・宮城門中の神屋）を巡る様子を目にすることができる。また、渡口の殿を拝する際には、集落北西部の丘陵上に所在する宮城御嶽に向けた遥拝も併せて行われる。この丘陵一帯には、かつて宮城村という集落があったとされ、同地に居住していた宮城門中の祖先が、渡口集落の草分けの家筋である屋号：大屋と併合し、渡口村に移り住んだと伝えられている。巡拝の最初に拝される大屋門中の神屋と、最後に拝される宮城門中の神屋では火をつけた線香を供えることから、周囲の小道では線香の香りが漂い、拝礼の営みを感じ取ることができる。その他の供物としては、ビンシーや火をつけない線香とそれを乗せた紙・白紙などが捧げられる。巡拝後は、公民館で歓談や休憩を交えながら祭祀が締めくくられる。



<各地域のウマチーで歴史的風致を形成する活動>

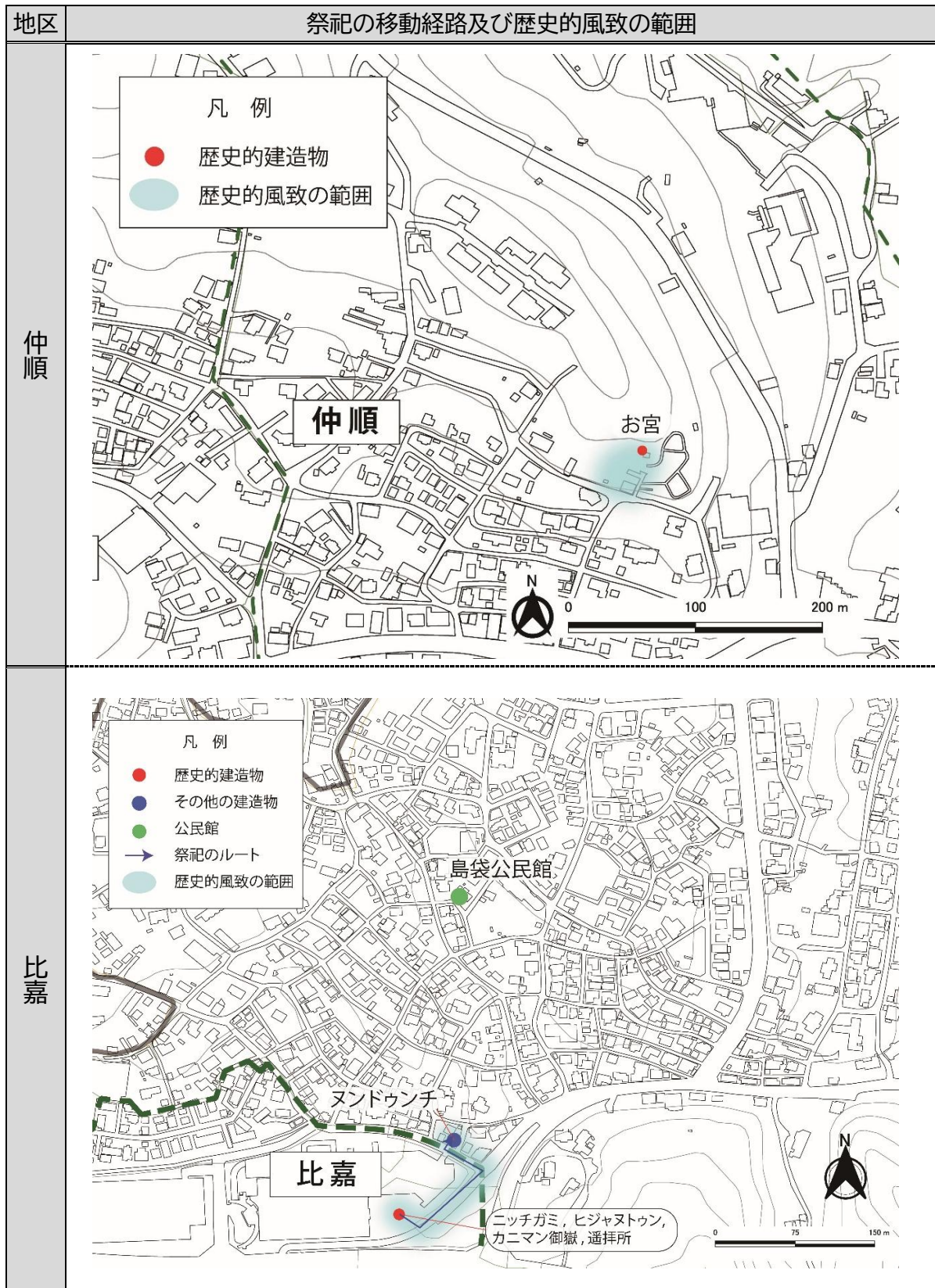
地区	活動の概要及び歴史性
仲順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・康熙52年(1713)成立の『由来記』にて、仲順村での麦穂祭（二月ウマチー）、稲二祭（五月ウマチー・六月ウマチー）についての記載。</li> <li>・仲順部落常会決議録（昭和24年(1949)）に記述。</li> </ul>
比嘉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・康熙52年(1713)『由来記』にて、比嘉村での麦穂祭（二月ウマチー）、稲二祭（五月ウマチー・六月ウマチー）の記載。（なお、現在は五月ウマチーのみ）</li> </ul>
熱田	<ul style="list-style-type: none"> <li>・康熙52年(1713)『由来記』にて、仲順村での麦穂祭（二月ウマチー）、稲二祭（五月ウマチー・六月ウマチー）の記載。</li> <li>・熱田区金銭出納帳（昭和44年(1969)）記載。</li> </ul>
和仁屋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・康熙52年(1713)『由来記』にて、和仁屋村での麦穂祭（二月ウマチー）、稲二祭（五月ウマチー・六月ウマチー）の記載。</li> </ul>
渡口	<ul style="list-style-type: none"> <li>・康熙52年(1713)『由来記』にて、渡口村での麦穂祭（二月ウマチー）、稲二祭（五月ウマチー・六月ウマチー）の記載。</li> </ul>
安谷屋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・康熙52年(1713)『由来記』において、安谷屋村での稲二祭（五月ウマチー・六月ウマチー）の記載。</li> </ul>

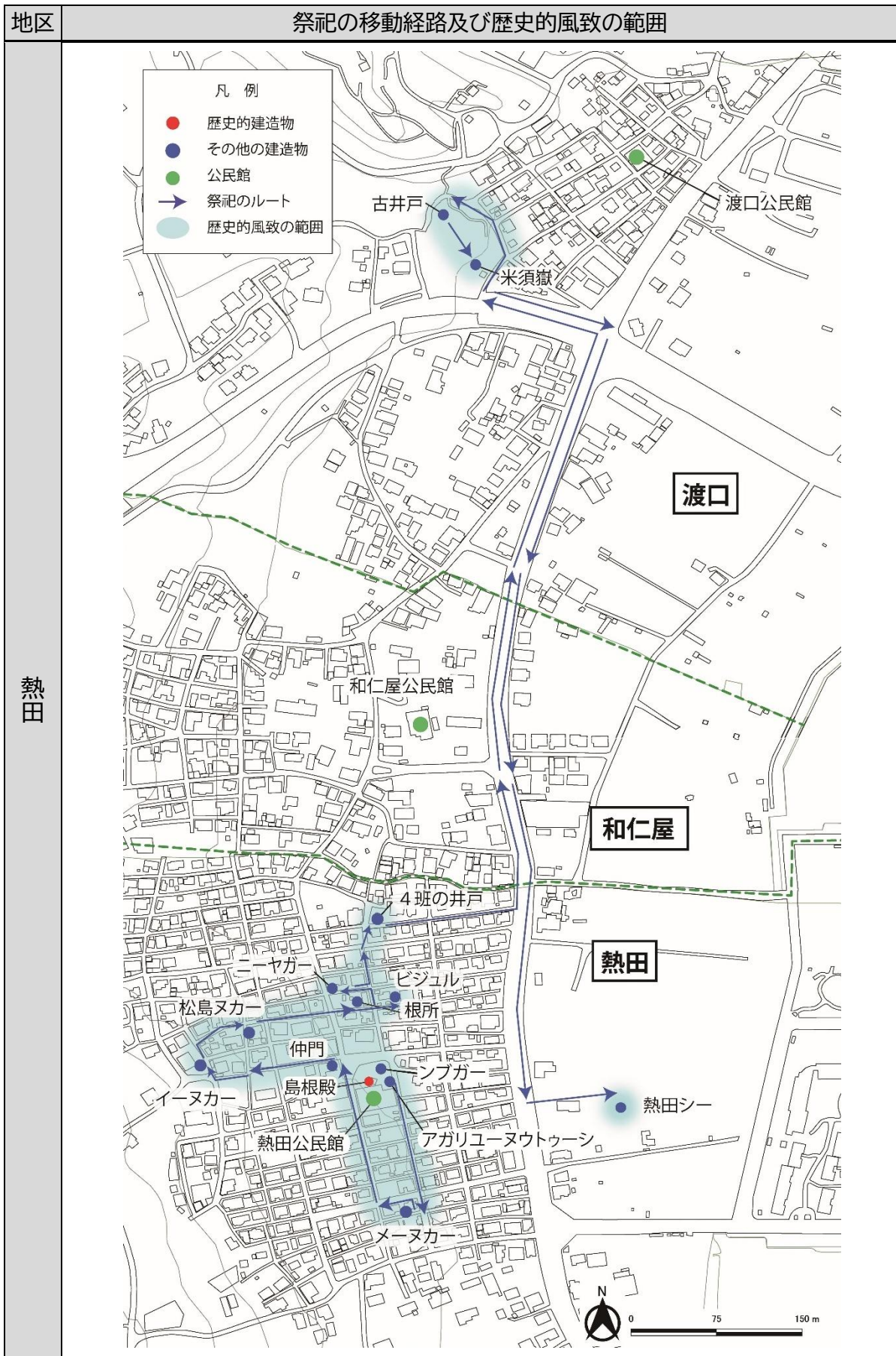
d) ウマチーにみる歴史的風致のまとめ

かつて稲麦の豊作祈願や収穫への感謝を込め、祭司によって執り行われてきたウマチーは、多くの地域で稲作が行われなくなった現在においても、地域の繁栄を願う祭祀として、形を変えながら地域住民によって継承されている。

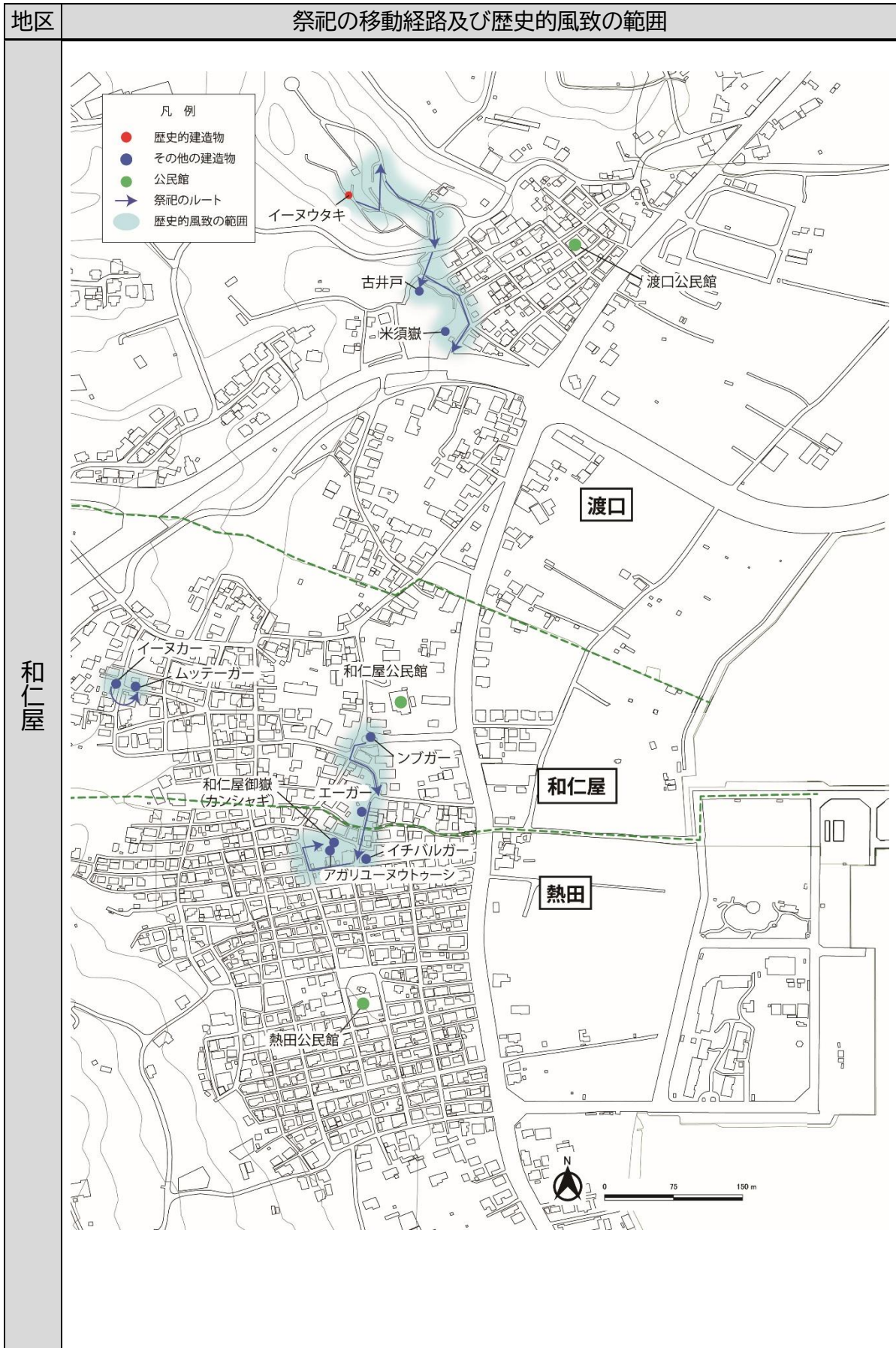
地域の拝所において静かに祈りを捧げる様子や、祭祀に加わった住民同士が和やかに歓談する様子が、集落の空間と人々の営みが重なる歴史的風致を形成している。

<各地域のウマチーにみる歴史的風致>

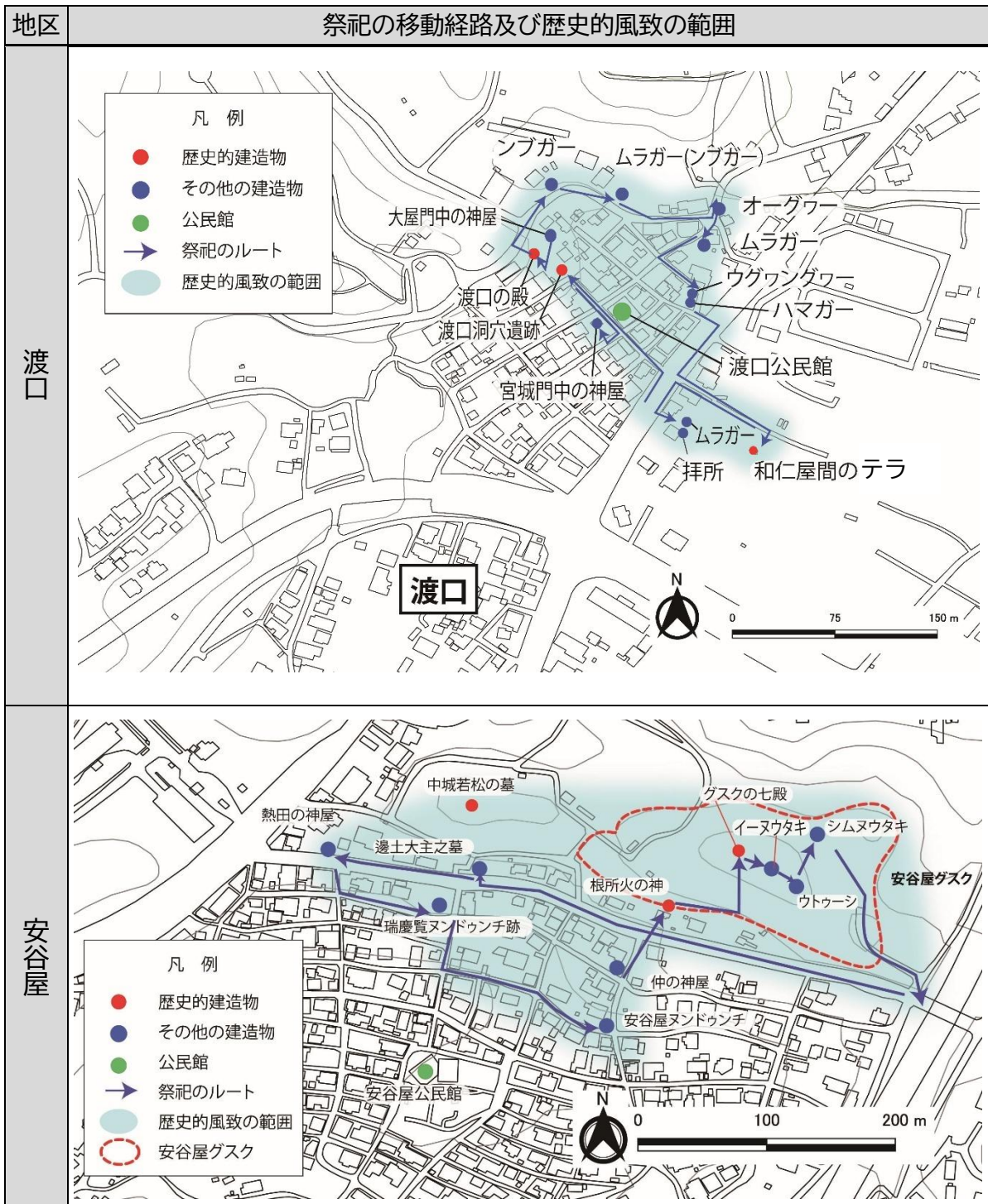




※島根殿とその他の建造物が、熱田の周辺市街地を形成している。



※和仁屋の建造物とイースウタキ周辺の建造物が、和仁屋の周辺市街地を形成している。



### ③綱引きにみる歴史的風致

#### a) 綱引きにかかる取り組みについて

日本各地では、綱引きを伴う祭事や神事が広く行われており、沖縄においても旧盆や夏の行事として地域に定着している。沖縄の綱引きは、ほとんどが集落単位で行われ、豊作と無病息災を祈願する風俗慣習として、平成6年(1994)には国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。

北中城村においても、現在は熱田、渡口、安谷屋、大城、荻道などの各地域で毎年行われており、歴史的な建造物の前で行われる拌みや綱を引きあう威勢のよい掛け声特徴的な年中行事となっている。以下に各地域の綱引きの取り組みを示す。



■熱田の綱引きの様子。子供たちを中心に大人も加わって、太鼓の合図で綱引きが行われる

#### b) 熱田の綱引きに関する建造物・活動の詳細

##### b-1) 熱田の建造物等

##### <熱田の綱引きにおいて歴史的風致を形成する建造物>

###### ●<sup>シマニドゥン</sup>島根殿



熱田地区のほぼ中央、熱田公民館の敷地内に位置する拌所である。島根殿は大きな岩を背にして本殿があり、その前に拌殿がある。以前は石の祠のみであったが、『村史民俗編』(平成8年(1996))によると、昭和15年(1940)の「紀元2600年記念」の際に鉄筋コンクリート造に建て替えられ、神社様式の拌所となったとされる。また、建て替え時に字内に点在する神々を本殿に合祀したという。本殿の形式は一間社流造であり、拌殿は入母屋造、平入の木造赤瓦本瓦葺で軸部は戦前のものとされる。



旧暦6月14日の綱引きの祭祀前に行う拌礼において、自治会役員や有志の方々が二番目に拌する。

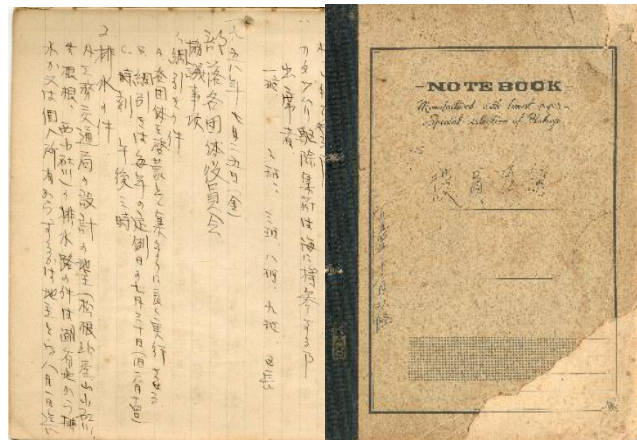
## <熱田の綱引きで巡拝されるその他の建造物>

本計画において、「熱田の綱引きにみる歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

建造物名		概要
ンブガー		熱田に所在するカー（井泉）。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の綱引きにおいて一番目に拝される。
アガリユーヌウトゥーシ		熱田に所在する拝所。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田の綱引きにおいて二番目に拝される。

## b-2) 熱田の活動

熱田地区の綱引きは、前段の儀式として集落内の主要な拝所の巡拝後に、熱田公民館前の通りで執り行われる。例年、旧暦6月14日に地域の豊作と無病息災を祈願する祭祀である。戦前、稲作を中心とした農業が盛んであった時代には、集落を挙げた重要な年中行事として位置づけられ、仕事も休んで準備や行事に取り組んだと伝えられている。熱田公民館所蔵の昭和33年(1958)の役員議事録においても「1958年7月25日部落各団体役員会協議事項 綱引きの件 A. 各団体を啓蒙して集まりに良く実行させる B. 綱引きは毎年の定例日の7月30日(旧6月14日)」とあり、当時から地域住民が主体となって取り組まれてきたことがうかがえる。



■熱田役員会議事録（熱田公民館提供）

祭祀当日には、自治会役員や有志の住民が参加し、綱引きに先立って拝みが行われる。ンブガー・島根殿・アガリユーヌウトゥーシの三か所の拝所やカーを巡拝し、供物としてビンシーと果物、火をつけない線香とそれを敷く紙・白紙などを供える。



■ンブガーを拝する自治会役員と有志の参加者

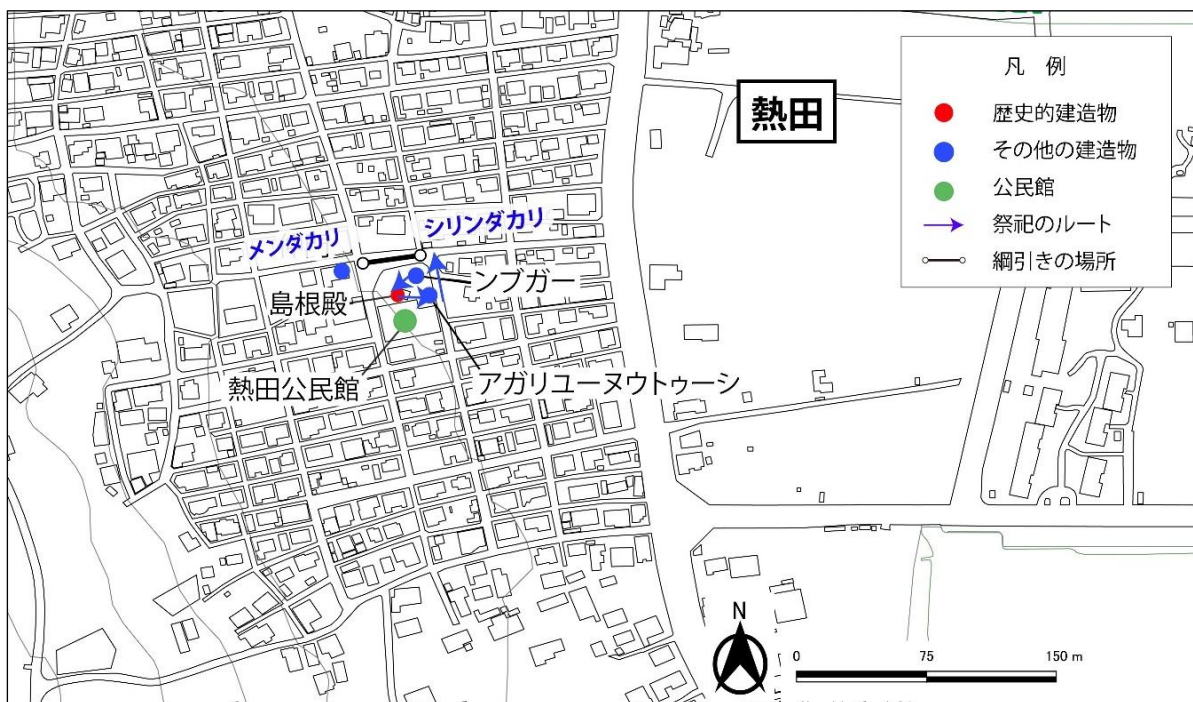
拝みを終わると、公民館北側に並行に伸びる道・シマナーカに、四本の旗頭と綱が設置される。かつて稲作が盛んであった頃には、各家庭から集めた藁を用いて大綱がつくられていたが、現在はロープが用いられている。公民館を境に西側を「メンダカリ（前）」、東側を「シリンダカリ（後）」と分け、地域の子供から大人までが太鼓の合図に合わせて綱を引きあう。綱引きは場所を入れ替えながら全部で二回行われ、太鼓の音と参加者の掛け声が辺りに響き渡る。綱引きを終えると、子供たちは菓子を受け取って解散し、自治会役員や有志の住民は片付けを行いながら公民館で歓談し、祭祀が締めくくられる。



■シマナーカに配置される綱



■シマナーカに配置される旗頭  
 (「大勝利」と書かれた旗が三本と、「西之平」と書かれた旗が設置される)



## c) 萩道の綱引きに関する建造物・活動の詳細

### c-1) 建造物等

#### <萩道の綱引きにおいて歴史的風致を形成する建造物>

##### ●萩道のヒージャーガー

北中城村南部の萩道地区に所在するカー（井泉）で、「ヒージャー」とは方言で「樋川」を意味し、湧水を石造の架け樋で取水する構造の井戸を指す。現在も井戸の石積みや樋、石敷き、周囲の土留め石積みがよく残っており、平成8年（1996）発刊の『村史民俗編』によれば、大正12年（1923）に改修されたものとされる。近年は井泉の周囲に遊び場や東屋が設けられ、地域住民の憩いの場ともなっている。



■ヒージャーガー

萩道の綱引きにおいて直接拝されることはないが、綱引きに先立って参加者が集落内を練り歩く「道ジュネー」が行われており、その際に参加者の隊列が通過する県道146号線沿いに位置している。萩道のヒージャーガーを背に、綱引きに参加する子供たちの掛け声や賑わいを感じ取ることができる。

#### <萩道の綱引きに関連するその他の建造物>

本計画において、「萩道の綱引きにみる歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

建造物名		概要
イーヌカー		萩道に所在するカー（井泉）。平成20年（2008）に萩道・大城湧水群のひとつとして環境省の「平成の名水百選」に認定された。正確な建築・建替年代は不詳。 萩道の綱引き（チナヒチ）において直接は拝されないが、イーヌカー前の通りで道ジュネーが行われる。
イリヌカー		萩道に所在するカー（井泉）である。平成20年（2008）に萩道・大城湧水群のひとつとして環境省の「平成の名水百選」に認定された。正確な建築・建替年代は不詳。 萩道の綱引き（チナヒチ）において直接は拝されないが、イリヌカー前の通りで道ジュネーが行われる。
萩道の歌碑		萩道に所在する歌碑で、民謡「挽物口説」の一節が刻まれている。平成14年（2002）に建立された。 萩道の綱引き（チナヒチ）において直接は拝されないが、歌碑前の通りで道ジュネーが行われる。

## c-2) 荻道の活動

荻道地区の綱引きは、前段の儀式として集落内を練り歩く道ジュネーを行った後に、荻道公民館横の通りで執り行われる。例年、旧暦6月14日に地域の豊作と無病息災を祈願する祭祀である。昭和40年(1965)5月17日付の『沖縄タイムス』掲載の記事「ふるさとの顔(74) 荻道」には、「同部落の綱引きは旧の六月に豊年祭りに行われている」とあり、あわせて「本物の綱のほかにつくった小さな縄を焼いて神様にそなえている」と紹介されている。かつては藁で作った綱が用いられていたが、現在は集落内で稲作が行われておらず藁が手に入りづらことから、麻製のロープが祭祀では用いられている。

祭祀が近づく頃になると、地域の子供たちは、かつて綱引きで使用されていた旗頭を模した太鼓型の灯籠「テークドゥール」を自作する。祭祀当日には、このテークドゥールを持って公民館に集まり、引率の大人や自治会役員とともに集落内を練り歩く「道ジュネー」を行う。この際、子供たちは「ワーラー、ワーラー」という掛け声をあげながら歩くが、これは、かつて道ジュネーが綱の材料となる藁を各家庭から集めるために行われていたことに由来する。道ジュネーの道中では、引率の大人が戦前の綱づくりや綱引きの様子、昔ながらの地域の風景などを子供たちに語り聞かせる様子を見聞きできる。



■沖縄タイムス(昭和40年)  
荻道に関する特集記事



■テークドゥールを手に公民館前に集まる子供たちの様子

集落を一巡して公民館に戻ると、公民館前の通りで綱引きが行われる。まずは子供だけが参加し、男女に分かれて綱を引き合う。勝負は二回行われ、二回目は初回に負けた側へ勝ちを譲ることで、一勝一敗で引き分けるよう取り計らわれている。



■子供たちを男女に組み分けて綱を引き合う様子

続いて、大人が参加する綱引きが行われる。特定の屋敷を境に集落内を東西に分け、参加者はそれぞれの居住地に応じて東西に分かれて綱を引き合う。子供たちの綱引きと同様に二本勝負とし、東西それぞれ一勝一敗となるよう取り計らわれる。綱引きが終わると、参加者は公民館の広場で飲食をともにしながら歓談し、祭祀を締めくくる。



■大人も参加する綱引きは居住地によって東西で分かれる



■綱引き後の公民館前広場の歓談の様子

一方、自治会役員らと有志の住民は、集落の外れにある「アカバンタ」と呼ばれる場所へ移動し、厄払いとして綱引きの綱頭を焼く儀礼を行う。かつては実際の綱引きで用いた綱頭を焼いていたが、現在は儀礼用に別途用意した小綱を用いて行われる。小綱に酒や水、米などの供物を供え、線香をあげて地域住民の無病息災などを祈願した後、火が点けられる。麻縄の焼ける匂いを周囲に漂わせ、小綱が燃え尽きるとともに儀礼は終了となる。



■集落北部の外れにある丘陵地「アカバンタ」バンタとは崖の淵を指す語句



■アカバンタで儀礼用の小綱を燃やす様子

#### d) 安谷屋の綱引きに関する建造物・活動の詳細

安谷屋地区の綱引きは、カシチーの祭祀とセットで執り行われる。集落内の拝所の巡拝の後に、屋号：仲の屋敷の庭と屋敷に面した通り（クシミチ）で綱を引く。例年、旧暦6月25日に住民の健康と豊年を祈願する祭祀である。

また、昭和33年(1958)8月14日付発行の『琉球新報』においては、旧暦6月25日にあたる同年8月10日において、安谷屋で豊年を祈願する綱引きが行われた記事が残されている。

※建造物・活動の詳細は「古城周辺にみる歴史的風致 <①グスクと祭祀活動にみる歴史的風致> (68ページ)」を参照



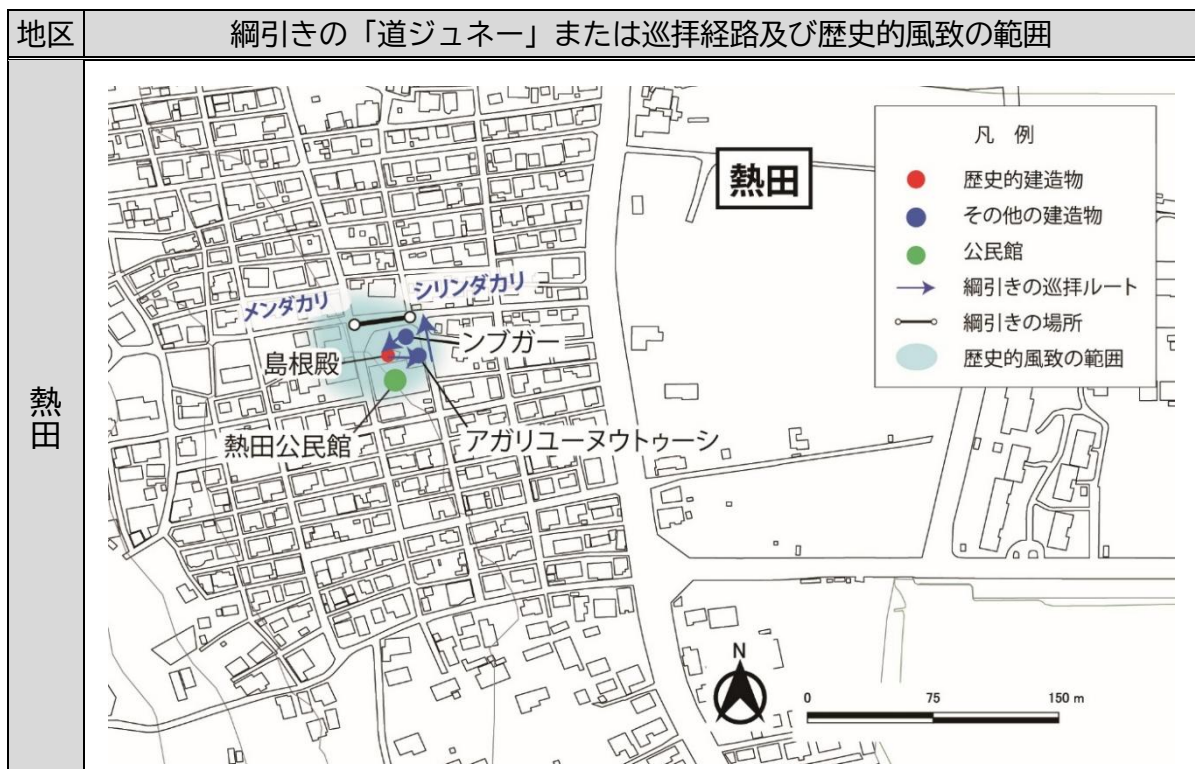
■昭和33年(1958)発行『琉球新報』

#### e) 綱引きにみる歴史的風致のまとめ

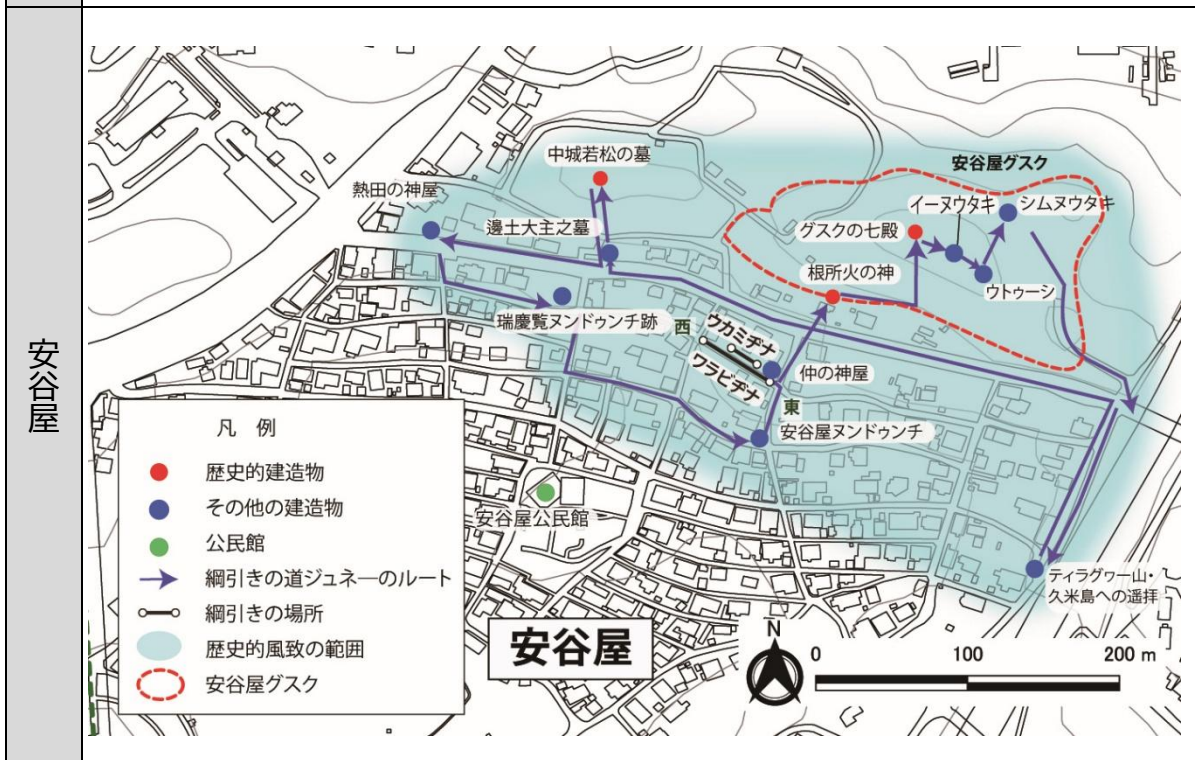
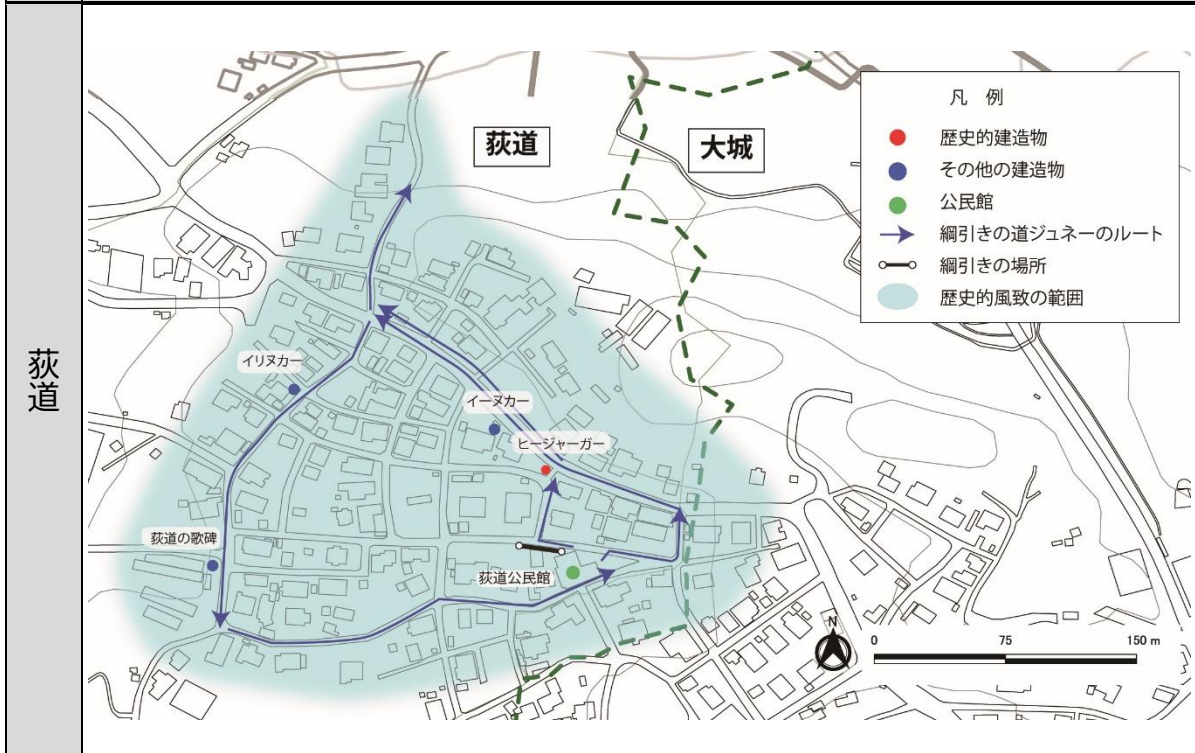
綱引きの祭祀は、豊年や無病息災を祈願する年中行事として、現在まで受け継がれてきている。拝みを伴う祭祀と綱の引き合いを通して、地域住民の人々の交流や地域への愛着を深める活動となっている。

集落内に響きあう住民たちの掛け声や太鼓の音色、拝みの祭祀とともに漂う線香や綱を焼く匂いなどの風情が、地域固有の歴史的風致を形成している。

#### <各地域の綱引きにみる歴史的風致>



地区 網引きの「道ジュネー」または巡拝経路及び歴史的風致の範囲



#### ④カシチー・ウハチにみる歴史的風致

##### a) カシチーにかかる取り組みについて

カシチーとは、沖縄諸島で古くから執り行われてきた年中行事の一つで、新米や糯米で炊いた強飯（カシチー）を火の神や祖霊に供え、稲の収穫を感謝し、次の年の豊作を祈願する祭祀である。北中城村では、喜舎場・熱田・和仁屋・島袋・瑞慶覧・安谷屋・大城・荻道などの集落において、旧暦6月25日に行われているが、現在は殆どの地域では稲作を行っていないため、地域の安全や住民の健康を祈願する行事としての意味合いを持つようになっている。



■安谷屋のカシチーの様子（瑞慶覧又ドゥンチ跡）

基本的には集落内の拝所に供物を捧げながら巡拝する形で行われるが、安谷屋では綱引きを併せて執り行われる一方で、熱田では新米を供えることからウハチ（御初）と呼ばれるなどの違いもある。以下に熱田地区と安谷屋地区のカシチー、ウハチの取り組みを示す。

##### b) 熱田のウハチに関する建造物・活動の詳細

###### b-1) 熱田の建造物等

###### <熱田のウハチにおいて歴史的風致を形成する建造物>

###### ●島根殿（再掲）

熱田地区に所在する拝所で、『村史民俗編』（平成8年(1996)発刊)によると、昭和15年(1940)に建て替えられ、現在の神社様式の拝所になったとされる

熱田地区のウハチにおいては、二番目に拝される。



## ●和仁屋間のテラ（再掲）

渡口地区に所在する拝所で、渡口交差点の北東側に位置し、南向きに設けられた方形造の石祠である。渡口地区に所在するため、昭和56年(1981)に県の有形民俗文化財に「渡口のテラ」の名称で指定された。

康熙52年(1713)成立の『由来記』に記述がある他、昭和45年(1970)発行の『村史』にも、当時の和仁屋間のテラの写真が残されている。

熱田のウハチにおいては、八番目に拝される。



## <熱田のウハチで巡拝されるその他の建造物>

本計画において、「熱田のウハチの歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

地区	建造物名		概要
熱田	ンブガー		熱田に所在するカー（井泉）。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田のウハチにおいては一番目に拝される。
	アガリユーヌウトウーシ		熱田に所在する拝所。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田のウハチにおいては三番目に拝される。
	熱田シー		熱田に所在する祠。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田のウハチにおいては最後の九番目に拝される。
渡口	古井戸		渡口に所在し、熱田集落発祥に関わる井戸。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田のウハチにおいては六番目に拝される。
	クミンヲ 米須嶽		渡口に所在し、熱田集落発祥に関わる祠。昭和63年(1988)に改修された。 熱田のウハチにおいては七番目に拝される。

## b-2) 熱田及び渡口における活動

熱田地区では、旧暦6月25日に行われる祭祀をウハチと呼び、古くは新米を供えて収穫への感謝と翌年の豊作を祈願する行事として執り行われてきた。現在では稲作が行われていないことから、地域住民の健康を祈願する祭祀として受け継がれている。

かつて集落の祭祀を司っていたノロや神役の継承者は現在おらず、自治会や地域の有志が中心となって祭祀を執り行っている。また、熱田公民館所蔵の『熱田区金銭出納帳』には、昭和39年(1964)のウハチ(オハチ)に際して支出された費用が記録されており、当時から地域住民が祭祀の運営や準備に深く関わっていたことが確認できる。

年	月	日	品名	収入金額	支出金額	差引残高
7	3		前年計りの種式主税			772.00
7	5	1	前下成三島宇野野光堂納金	10.00		582.00
7	10	2	寺宮代(前下成三島宇野野光堂)		4.00	578.00
7	4	3	マニローブ		32.34	545.66
7	18	4	民謡文能本外運賃		5.00	540.66
7	17	5	松村の100円500円500円500円	10.00		550.66
7	16	6	甲島 様 工賃		4.00	546.66
7	22	7	細引きの後 前納金			546.66
7	28	8	青年会へ納付金		10.00	536.66
7	30	9	7月の電灯料金		1.18	535.48
7	31	10	中学との野球 ボール		1.20	534.28
8	1	11	7月の長書記手数料		40.00	494.28
8	6	12	民謡工能納付金の車賃			494.28
8	6	13	学事費納付金の車賃			494.28
8	10	14	前下成三島宇野野光堂納金	7.40		501.68

■熱田金銭出納帳(熱田公民館提供)

ウハチの祭祀では、熱田地区の拝所だけでなく、渡口地区の拝所や市外の神社など、合わせて九か所を巡拝する。これは、熱田集落が元々、渡口集落北側一帯から現在の地に移り住んだと伝えられていることに由来する。

まず、集落内の拝所三か所(ンブガー・島根殿・アガリユヌウトウシ)では、参加者がビンシーを携えて巡拝し、果物や火をつけない線香などを供えながら拝礼する様子を目にすることができる。



■カーや拝所への供物

続いて参加者は車で移動し、宜野湾市に所在する普天満宮と普天満山神宮寺の二社を参拝する。

その後、渡口地区へ車で移動し、拝所二か所(古井戸・米須嶽)を拝し、さらに車で和仁屋間のテラへと向かう。和仁屋間のテラでは、石造りの祠の内部に自治会長と代表者一名が身をかがめて入り、その



■普天満山神宮寺への参拝の様子

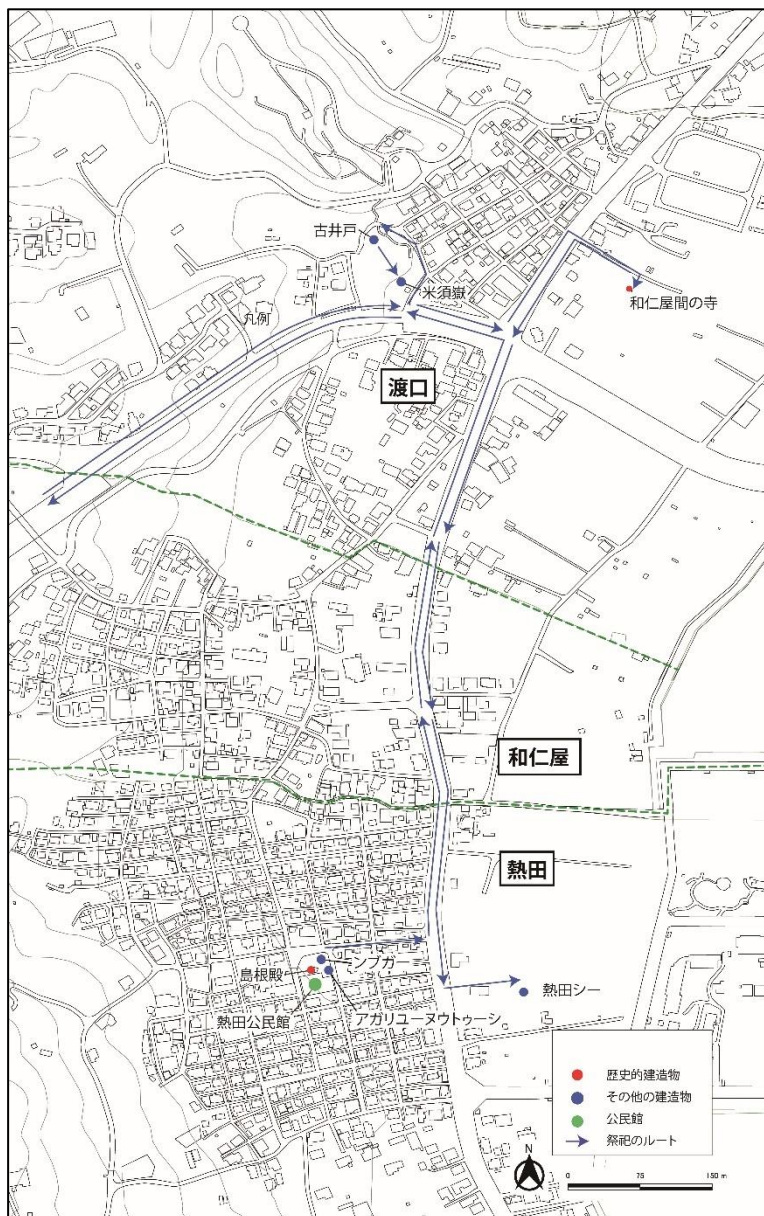
他の参加者は祠の入口を囲うように外から拝礼する様子が見られる。

最後に再び車で熱田地区へ戻り、海のかなたへの遥拝所とされる熱田シーを拝した後、公民館にて飲み物や食べ物が振るまわれ、歓談のうちに祭祀は締めくくられる。



■和仁屋間のテラに入り拝礼する自治会長と代表者(左) その他参加者は外で拝む(右)

### <熱田のウハチのルート>

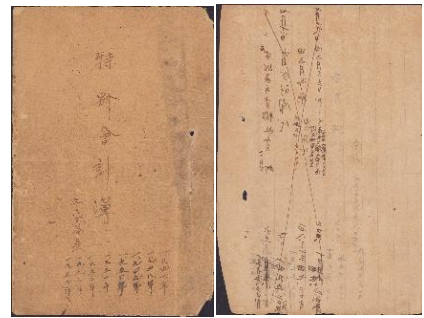


### c) 安谷屋のカシチーに関する建造物・活動の詳細

安谷屋のカシチーは、旧暦6月25日頃に行われる稲の収穫に感謝する祭祀である。

安谷屋公民館所蔵の『字安谷屋特別會計簿』（昭和26年(1951)）には、「旧六月二十五日 かしち」に際し、卵やメリケン粉、酒などを購入した記録が残されている。

※建造物・活動の詳細は「古城周辺にみる歴史的風致  
＜②グスクと祭祀活動にみる歴史的風致＞68 ページ」を参照



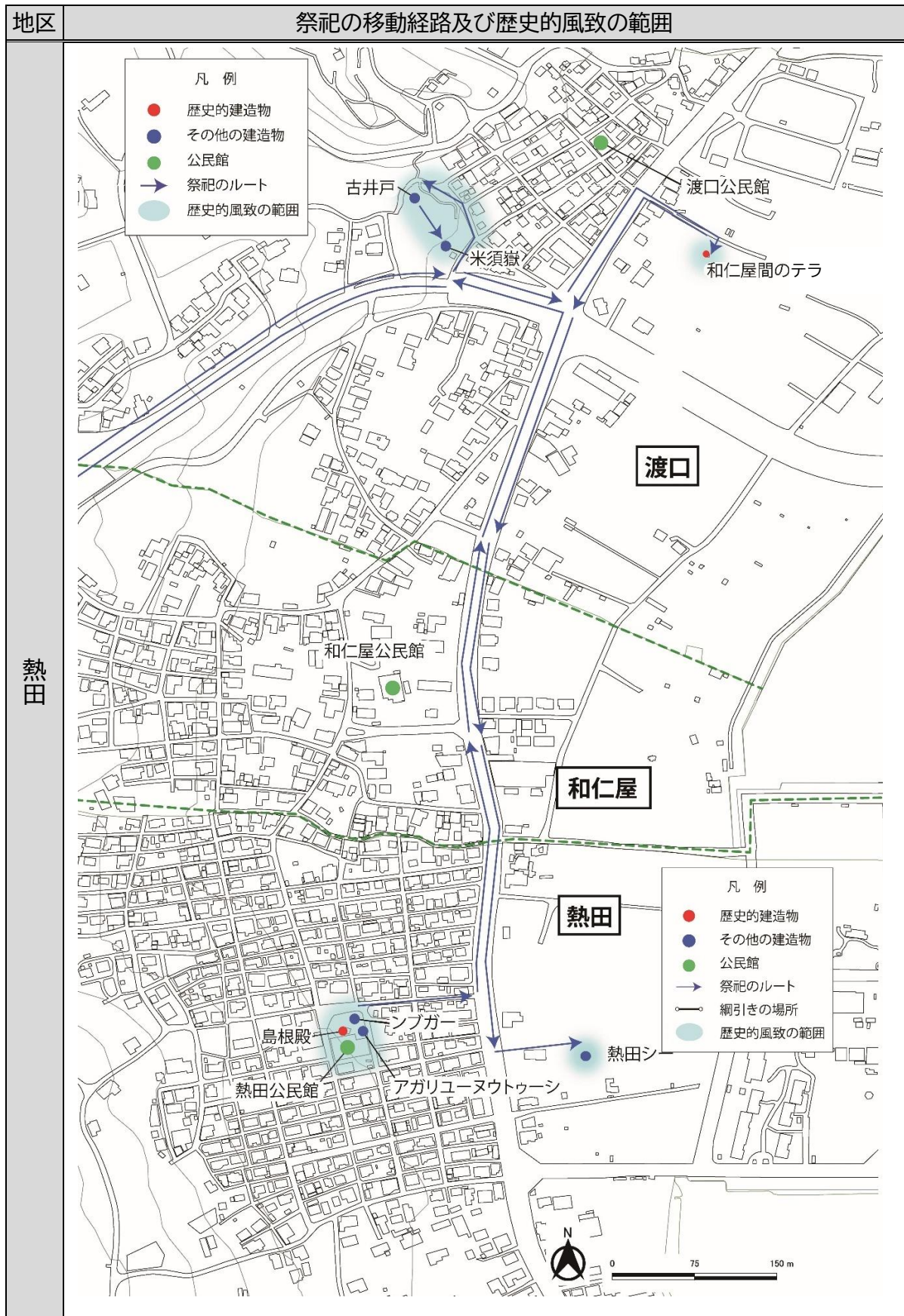
■昭和26年(1951)『安谷屋区特別會計簿』における備品購入の記載

### d) カシチー・ウハチにみる歴史的風致のまとめ

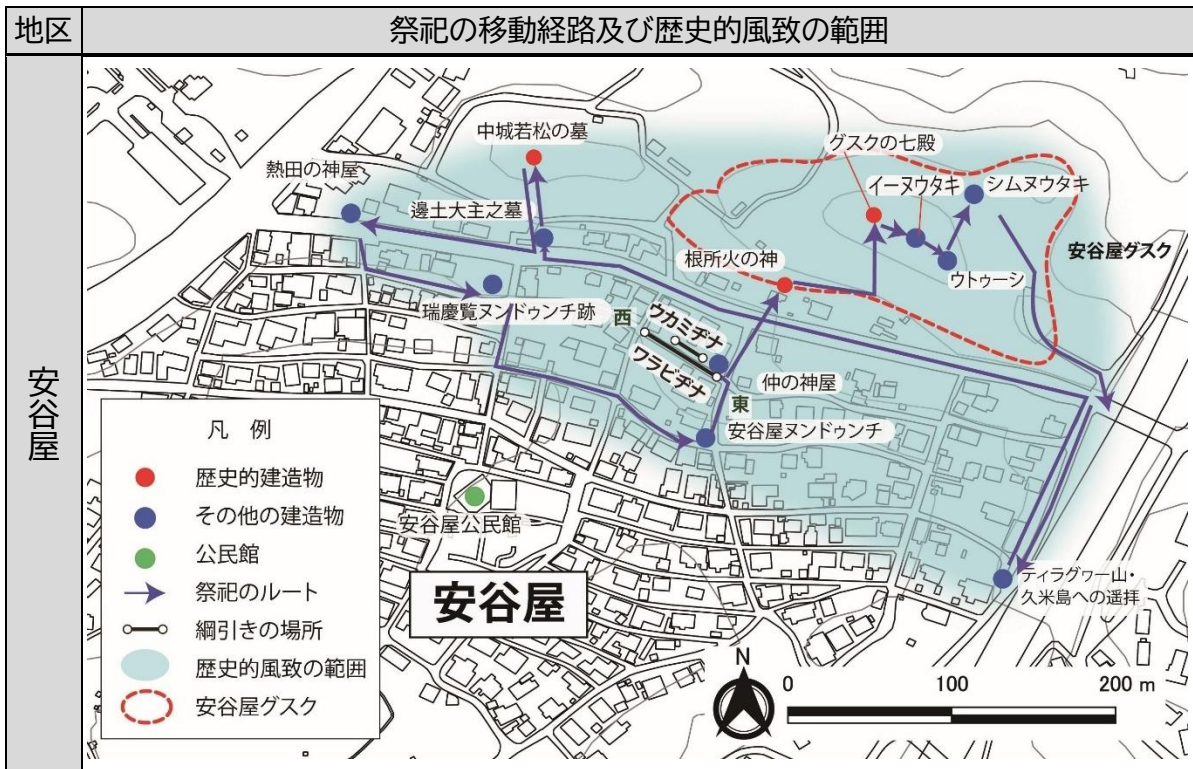
かつて稲の収穫を感謝し次年の方策を祈願して祖霊や火の神に強飯を供える祭祀であったカシチーとウハチは、稲作を行わなくなった現在においても、地域の繁栄を願う祭祀として、形を変えながら地域住民によって継承されている。

地域の拝所において静かに祈りを捧げる様子や、祭祀に加わった住民同士が和やかに歓談する様子が、集落の空間と人々の営みが重なる歴史的風致を形成している。

<各地域のカシチー・ウハチの歴史的風致図>



※島根殿とその他の建造物が、熱田の周辺市街地を形成している。



## ⑤ハタスガシーにみる歴史的風致

### a) ハタスガシーにかかる取り組みについて

ハタスガシーとは、沖縄本島中部において盆行事の直後に行われる悪霊払いの行事である。「ハタ(旗)スガシー」という名称は、「旗をなびかせながら村中を練り歩いて浄め、その旗のもとでムラアシビ(村芝居)を行う」ことに由来するとされる。また、「スガシー」という語句には「風を通す、風に当てる」という意味がある。

北中城村においては、旧暦7月17日に、村南部の荻道地区と大城地区の隣接する二集落が合同で実施しており、それぞれの集落が地域の豊年と住民の無病息災を祈願している。



■ 拝所の前で旗を振る参加者の様子(荻道)

### b) 荻道・大城のハタスガシーに関する建造物・活動の詳細

#### <ハタスガシーにおいて歴史的風致を形成する建造物>

##### ●<sup>チュンナーニードウクル</sup>喜友名根所

北中城村南部の大城地区に所在する拝所で、荻道地区と大城地区の両住民がハタスガシーに際して拝している。「根所」とは、「集落の発祥に関わる最も古い家」のことを意味する。

平成8年(1996)発刊の『村史民俗編』には、「戦前は茅葺の母屋と家畜小屋、祭祀のための建造物・「神アシャギ」が建っていた」とあるが、戦争により直系の子孫が絶え、現在は敷地内に祖霊などを祀る建物「神屋」が残されている。正確な建築時期は不明であるが、昭和40年(1965)5月18日付『沖縄タイムス』の「ふるさとの顔(75)北中城村(6)大城」記事には、根所内の祭壇の様子を伝える記述が残されており、その頃には既に現在の拝所の形式に近い構造であったものと推定される。



■ 喜友名根所 改修前の外観



■ 改修前の内部の壇

当初の神屋は四畳ほどの敷地にコンクリートブロック積みの壁を巡らせて祭壇を囲う造りで、内部正面奥壁にはブロックの空洞を利用した換気口が設けられていた。入口には、観音開きの木製の扉が据えられていた痕跡が確認できるが、近年は常時開放された状態であった。直近の大城自治会による改修により、現在は鉄筋コンクリート造の平屋となっている。入口にはアルミサッシ窓を設えており、普段は施錠され内部に入れないように管理されている。外観は大きく変化したものの、内部の祭壇は従前の造りを維持している。



■喜友名根所 改修後の外観



■改修後の内部の祭壇

## ●クチャニドゥクル 久知屋根所

北中城村南部の大城地区に所在する拝所で、喜友名根所と同様に、集落発祥チュンナーニドゥクルに関わる根所であると伝えられている。

一般的な鉄筋コンクリート造り平屋の住宅で、居住空間である母屋と、火の神のほか祖先や観音絵像を祀った祭壇のある部屋（神屋）に分かれる。このうち、祖先を祀った祭壇を荻道地区と大城地区の住民が拝している。正確な建築時期は不明であるが、昭和40年(1965)5月18日付『沖縄タイムス』の「ふるさとの顔(75)北中城村(6)大城」記事に、「クチャの屋敷跡」や「クチャ根所」との記述がみられることから、その頃には既に当該拝所が存在していたものと推定される。



■久知屋根所 外観（母屋）



■神屋の祖先を祀った祭壇

## ●荻道のヒージャーガー

北中城村南部の荻道地区に所在するカー（井泉）で、「ヒージャー」とは方言で「樋川」を意味し、湧水を石造の架け樋で取水する構造の井戸を指す。現在も井戸の石積みや樋、石敷き、周囲の土留め石積みがよく残っており、平成8年(1996)発行の『村史民俗編』によれば、大正12年(1923)に改修されたものとされる。近年は井泉の周囲







■荻道のヒージャーガー

に遊び場や東屋が設けられ、地域住民の憩いの場ともなっている。

ハタスガシーにおいて直接拝されることはないが、旗頭の行列が通る県道146号線沿いに位置しており、荻道のヒージャーガーを背にその掛け声や賑わいを感じ取ることができる。

## <ハタスガシー（大城・荻道）に関連するその他の建造物>

本計画において、「ハタスガシーの歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

地区	建造物名		概要
荻道	ウカミヤー (御神屋)		荻道地区に所在する拝所。集落の守り神を祀る祭壇が設けられている。現在の御神屋は、昭和50年(1975)年以降に改修・建て替えられたものである。 ハタスガシーで使用される荻道の旗頭は御神屋に保管されており、祭祀の日には青年会や有志の人々によって取り出され、組み立てられる。
	仲元門中の根所 <small>ムンチュウ</small>		荻道地区に所在する旧家で、荻道集落の草分けの家とされているが、その設立年代は不詳である。建物内部には、仲元家の遠祖と観音を祀る祭壇が設けられており、荻道の自治会長や有志の人々によって、二番目に拝されている。
大城	ヌンドウンチ跡 (ヌンドウルチ跡)		大城地区に所在する拝所で、大城ノロの屋敷跡とされる。戦前には家屋が建っていたが、沖縄戦で焼失し、現在は敷地内に神屋（設立年代不詳）のみ建てられている。 ハタスガシーでは、大城集落だけでなく、荻道集落の人々もこの拝所を拝している。
	前喜友名の拝所 <small>ムンチュウ</small>		大城地区に所在する拝所で、ヌンドウンチ跡に近接した敷地に位置している。設立年代は不詳で、コンクリートブロックの壁面に、内部はブロックを積み上げた祭壇が設けられている。 ハタスガシーでは荻道集落の人々が拝している。

### c) 荻道・大城のハタスガシーの活動の詳細

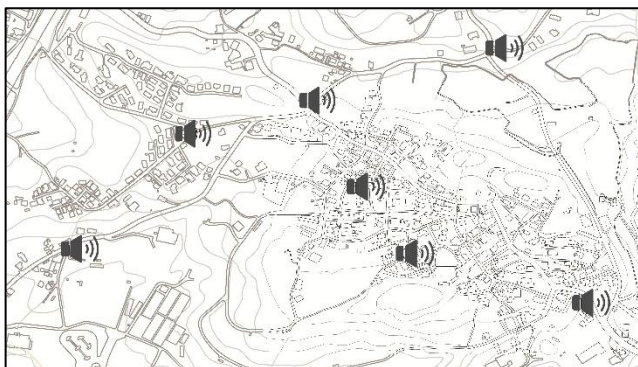
旧暦7月17日に行われるハタスガシー（旗すがし）は「チャイファー」とも呼ばれ、荻道・大城の両集落が合同で行う厄払いの祭事である。有志らが聖地や旧家を巡拝するとともに、旗頭を先頭に銅鑼の音とかけ声に合わせて住民が集落内を練り歩く。祭祀の終盤には、両集落の旗頭行列が合流し、荻道・大城境界の広場で棒術の演舞が披露される。当日は、荻道・大城の両自治会長による公民館の屋外拡声器（スピーカー）からの呼びかけを合図に、家を出て拝所へと向かう住民たちの姿が見られ、両集落全体が祭祀の賑わいに包まれる。

荻道・大城が合同で祭祀を行うようになった経緯や、いつ頃から

行われるようになった祭祀かといった歴史は明らかではない。平成8年(1996)発行の『村史民俗編』には「大城の村遊びは、明治の末頃まではやっていたが、大正の初め頃には中断し、昭和の初め頃に復活した。その大正年間、御願としての旗すがし(行列)だけをやっていた。」との記録があり、少なくとも大正時代(1912～1926年)には大城でハタスガシーが行われていたことがわかる。また、昭和40年(1965)の5月17日付『沖縄タイムス』の記事「ふるさとの顔(74) 北中城村(5) 荻道」においても、荻道で旧暦7月17日に行われた祭祀の様子が描写されている。



■ウカミヤーから取り出された荻道の旗頭



■荻道・大城一帯の屋外拡声器の位置図

## 【祭祀の開始前】

旧暦7月17日のハタスガシー当日夕方頃には、荻道・大城両公民館の屋外拡声器(スピーカー)から開催時刻の案内と住民への参加呼びかけが流される。その合図を受けて、荻道の住民はウカミヤーへ、大城の住民はヌンドウルチ跡へと向かい始める。

荻道のウカミヤーには旗頭が保管されており、拝所に集まった青年会や有志らによって組み立てが行われる。

一方、大城集落では戦前までヌンドウルチ跡に旗頭等を保管していたが、現在は別の場所へ移されている。祭祀当日は、夕刻になると県道146号線の一角、通称「ウフミチ」と呼ばれる道路沿いに大城の旗頭が立てられ、銅鑼の音が鳴り響く。その音を受け、大城集落の住民らが徐々に集まってくる様子を目にすることができる。

## 【旗頭】

年中行事などに用いられる<sup>のぼり</sup>幟のことを指し、先頭にはトゥール(灯籠<sup>とうろう</sup>)やゴ(輪)などの装飾が施される。全長6～8m、重

さは50～60kgほどで、旗には地域を象徴する言葉や祈願の語句が記される。荻道の旗頭には「天下泰平遊楽」、大城の旗頭には「飛龍昇天」と書かれている。

## 【荻道のハタスガシー】

荻道の自治会長や有志は先ずウカミヤーに集まり、荻道内にある二つの拝所であるウカミヤーと仲元門中の根所を巡拝する。その間、青年会や子供たちはウカミヤーに集合し、旗頭行列の開始を待つ。自治会長ら一部の参加者は仲元門中の根所を拝んだ後、大城地域の拝所へと向かうが、旗頭行列の一団はウカミヤーに残り行進を始める。子供が銅鑼を打ち鳴らし、参加者が



■銅鑼の音を聞いて家から出てきた大城の住民の様子



■荻道(左)と大城(右)の旗頭



■仲元門中の根所の祭壇を拝する自治会長や有志の参加者

「チェイファ チェイファ」とかけ声を上げる中、青年会の若者が旗頭を掲げ、ウカミヤ前の広場を反時計回りに七周半練り歩く。その後、一行はウフミチを通して、荻道・大城の境界にある兄弟広場へと行進する。



■ウフミチを練り歩く青年会や子供達

一方、大城へ移動した荻道の自治会長らは、喜友名根所、久知屋根所、ヌンドウンチ跡、前喜友名の拝所を巡拝する。平成8年(1996)発刊の『村史民俗編』では、「荻道部落が大城の聖地・根所を拝むいわれは定かではない」としつつも、「荻道と大城が「ウンジョウ・ウフグスク」（荻道・大城）と二村落で併称されるように、両ムラの関係は深いところがあった」と記されている。

巡拝を終えると、同じくハタスガシーの巡拝を行っていた大城側の自治会長や住民の一団とウフミチで合流し、兄弟広場へと向かう。

### 【大城のハタスガシー】

公民館からの屋外拡声器(スピーカー)による案内の後、夕刻になるとヌンドウンチ跡前のウフミチ沿いに旗頭が立てられ、銅鑼が打ち鳴らされる。供物を携えた自治会長や住民が次々と旗頭周辺に集まり、ヌンドウンチ跡へと移動する。

大城では、荻道のように拝所の巡拝と旗頭行列を分けず、旗頭を引き連れて集落内の拝所を巡る特徴がある。ヌンドウンチ跡、喜友名根所、久知屋根所を巡拝した後、荻道の参加者とウフミチで合流し、兄弟広場へと移動する。



■兄弟広場へ向かう大城の人々



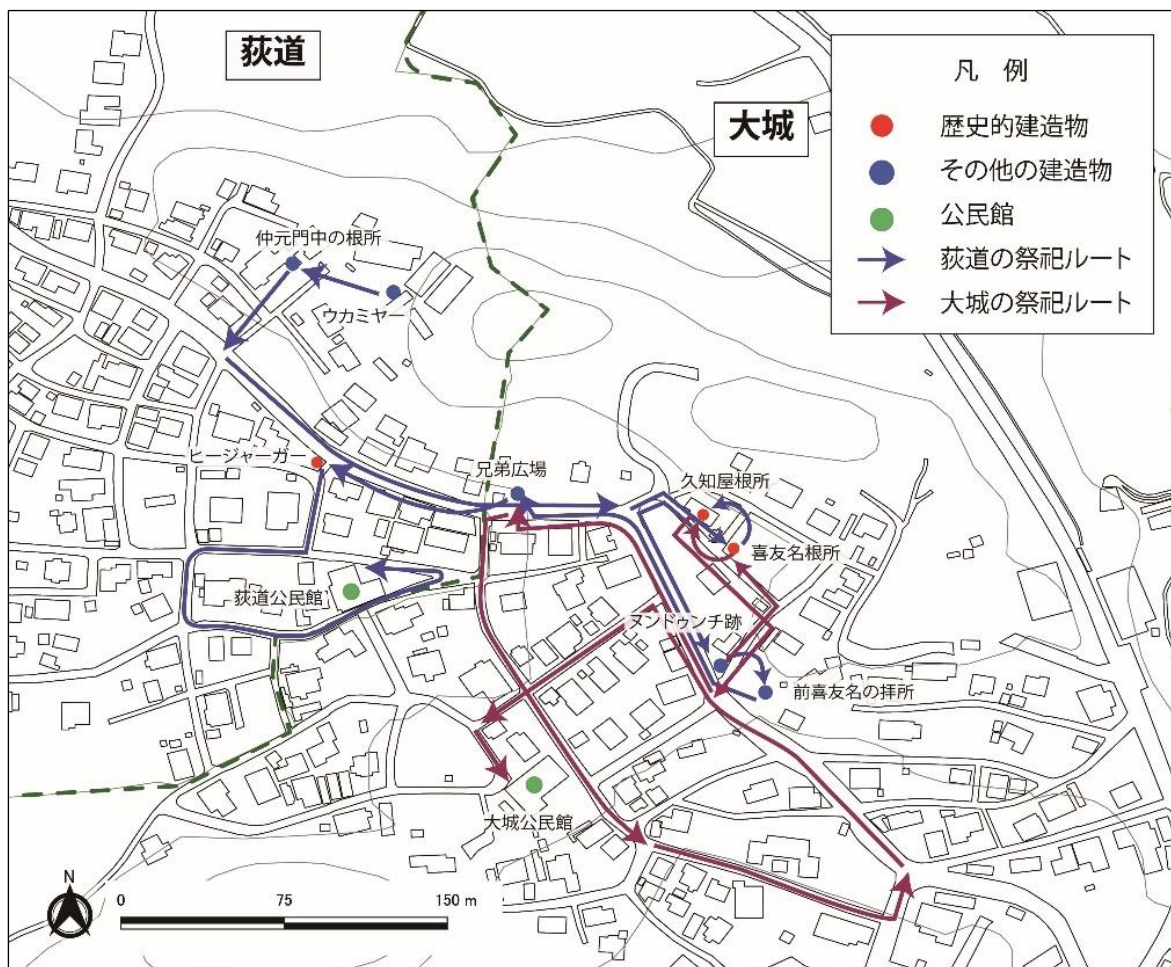
■兄弟広場で行われる棒術の演舞

### 【荻道・大城の合流後】

兄弟広場に荻道・大城の参加者や旗頭が揃うと、双方の自治会長の挨拶に続き、代表者が選ばれて「チョーデーボー（兄弟棒）」の演舞が披露される。

演舞の後、荻道の参加者は公民館へ移動し、盆踊りが催される。大城の参加者は再び集落内を練り歩いた後、公民館に移動し、菓子や飲み物を囲んで歓談し、祭祀は終了となる。

#### ■ハタスガシの巡拝ルート



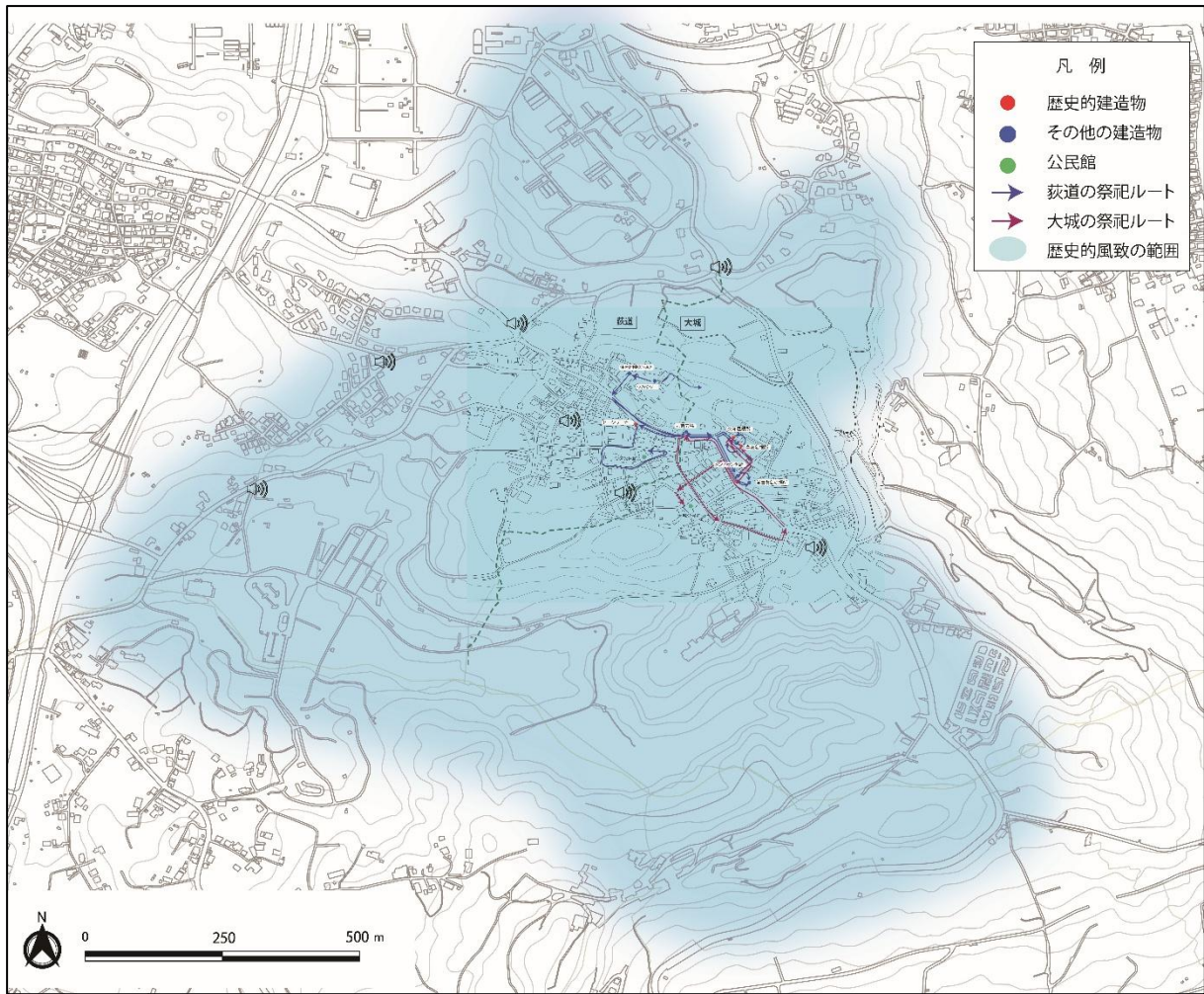
#### d) 荻道・大城のハタスガシにみる歴史的風致のまとめ

荻道・大城地域において行われるハタスガシは、旧暦7月17日に両集落が共同で実施する厄払いの祭祀であり、旗頭を先頭に集落内を巡拝し、地域の豊穡と無病息災を祈願している。

祭祀は喜友名根所や久知屋根所など集落の発祥や信仰に関わる歴史的な建造物と一体となって受け継がれてきた。

祭祀における銅鑼の音色や掛け声の響きは、両集落全体に賑わいととも住民の一体感を生み出し、荻道・大城集落に固有の歴史的風致が形成されている。

◆ハタスガシーにみる歴史的風致図



## おわりに

村内各集落に点在する御嶽、神屋、根所、カーなどの空間は、地域における神聖な場として位置づけられ、集落ごとの年中行事（祭祀）が執り行われてきた。これらの場所は、先人への感謝や地域住民の無病息災、集落の発展などを祈願する場として、地域の人々にとって精神的な面でも文化的な面でも重要な役割を果たしている。

村内の祭祀は、かつて中心的な役割を担っていたノロの系譜が途絶えた後も、地域において大切に受け継がれ、現在は自治会や有志の地域住民によって執り行われている。現代に至るまでに、祭祀目的の変化、拝礼作法の簡略化などがみられるものの、地域の繁栄や住民の安寧を願う、祈りに込められた人々の思いは、今日まで大きく変わることなく受け継がれている。

村内各集落において、数百年にわたり受け継がれてきた祭祀と、御嶽や神屋、カーなどの聖地・祭祀空間、さらにそれらを守り続けていこうとする地域住民の営みが一体となり、良好な歴史的風致を形成している。

### ◆地域の祭祀にみる歴史的風致図

